

地域探究型キャリア教育を通じた高校生の一般性自己効力感向上に関する研究

-地域の社会人介入への検討にむけて-

令和6年度

三重大学大学院 地域イノベーション学研究科

博士前期課程 地域イノベーション学専攻

奥山 夢菜

目次

第1章 序論

第1節 研究の背景と問題意識.....	1
第2節 本論文の目的と構成.....	2

第2章 キャリア教育における課題

第1節 高校でのキャリア教育における課題	4
第2節 総合学科における, 産業社会と人間とキャリア教育	8

第3章 自己効力感とは

第1節 自己効力感について	10
第2節 高校生の自己効力感の現状	11
第3節 地域での自己効力感	12

第4章 調査の概要

第1節 調査対象校の概要.....	14
第2節 飯南高校のカリキュラムの特徴	18
第3節 先行調査の概要	26
第4節 調査対象と調査方法.....	30
第5節 調査結果.....	38

第5章 考察と今後に向けた研究の課題

第1節 考察.....	66
第2節 研究の課題	69

注釈.....	70
---------	----

参考文献	71
------------	----

付録.....	75
---------	----

謝辞.....	91
---------	----

A study on improving high school students' general self-efficacy through local cooperation career education: Toward considering intervention by working person in the local cooperation career education

Yumena Okuyama
September 2024

1. Introduction

Career education aims to "foster the necessary foundational abilities and attitudes for social and professional independence," but there are issues with career education, such as a lack of awareness of its significance and effectiveness, and the difficulty of external collaboration. Self-efficacy is also thought to play an important role in career education, and is used in many studies, but most of them are about Career path after graduation.

Self-efficacy is "the prospect or expectation that a certain behavior can be done well" and is said to be controllable by four information sources: "Performance accomplishments," "Vicarious experience," "Verbal persuasion," and "Emotional arousal."

The purpose of this study is to confirm the self-efficacy of students in a "career education program" that is compulsory throughout the three years of high school and is linked to the local community, and research at how they have engaged with local person, we will consider ways in which we can intervene more effectively.

2. Methods

We conducted two surveys using Google Forms on first- to third-year students at Iinan High School in Mie Prefecture, which was selected for the "Project for Promoting High School Education Reform in Collaboration with Local Communities" by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan.

The survey method consisted of organizing previous studies and surveys, organizing the function of the curriculum as an information source, interviewing the school, and conducting a questionnaire survey of the students. The survey items included students' self-efficacy, their relationships with others, other interpersonal skills, and changes in their future outlook, using the Generalized Self-Efficacy Scale (GSES) by Sakano et al. Based on the results, the relationship between self-efficacy and relationships with others was confirmed by cross-tabulation.

3. Results

The self-efficacy of students who participated in the local problem-solving career education program at Iinan High School was confirmed to have improved overall compared to when they enrolled, and the reliability of the responses was also guaranteed, as there were no significant differences in trends in items other than self-efficacy when compared with questionnaires conducted by previous research institutions.

Students' perceptions of relationships and influences with local person were "verbal persuasion," "Emotional arousal," and although "Vicarious experience" were somewhat rare, they were important factors. It was also suggested that students may be using each other as models and "Vicarious experience" references.

4. Discussion

A high self-efficacy is a good thing, but a low self-efficacy may indicate that the student understands their current position, has some goals, or is aware that they can do more, and thus needs to be carefully observed by checking specific descriptions. The results of the survey suggest that students can improve their sense of self-efficacy by thinking about their own future, and through various information sources, while nurturing their basic and general abilities through the three-year curriculum.

References

- [1] Bandura, A : Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84, P.191-215, 1977
- [2] Y. Sakano, M. Tojo: An Attempt to Create a Generalized Self-Efficacy Scale, *Japanese Journal of Behavioral Therapy*, Vol. 12, No. 1, P. 73-82, 1986

第1章 序論

第1節 研究の背景と問題意識

内閣府が2014年に7か国の13～29歳の若者を対象に行った国際意識調査において、日本の若者は諸外国と比べて、「うまくいくかわからないことに對し意欲的に取り組む」という意識が低いこと、また、「将来に對して明るい希望を持っていないこと」が示され、この結果から、日本における若者の自己効力感とは諸外国と比べて低いことが明らかとなった(藤井 2021)。

自己効力感とは、「ある行動をきちんと遂行できるかどうかという見通しや予想」(Bandura, 1977)と定義され、課題遂行のために必要な技能を持っているかいないかにこだわらず、出来ると思うかどうかを問うものである。

自己効力感とは行動に直接的に影響を与えると仮定されており、ある特定の課題に對する自己効力が高ければ、その課題に對して頻繁に働きかけ、それが良い結果にもつながり、逆に自己効力が低いと、課題に應じた行動を避けるようになり、従って得られる結果のレベルも落ちることが予測される。

すなわち、自己効力感が低いことは、うまくいくかわからないことに對しきちんと遂行できるかどうかという見通しや予想が低く、課題に應じた行動を避けるようになり、得られる結果のレベルも落ちることと考えられよう。

現代は、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の時代といわれ、日本の若者には、今後の予測困難な社会の中で自ら考え、周囲と協働し課題を解決する力が求められており、中でも社会への移行期である高校生へは社会からの期待が寄せられている。

先行研究の状況として、辰巳(2011)は、国内の若者の自己効力感に對する研究は進路選択社会的自己効力感や社会的自己効力感、ストレスへの自己効力感などがあるが、生き方つまりライフキャリアを包括するようなものは国内では少ないとする。

筆者の関心は、高校生のライフキャリアを包括するような自己効力感の向上であり、これらの取組は、学校内だけで完結させるものではなく、文部科学省新学習指導要領の基本的な理念である「社会に開かれた教育課程」として、学校には実社会と連携・協働した教育活動を充実させることがますます求められている。社会のつながりの中で学ぶことで、子どもたちは、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことができ、このことは、変化の激しい社会において、子どもたちが困難を乗り越え、未来に向けて進む希望や力になるのではないかと。

また、ライフキャリアに関する測定のために自己効力感を測定する理由として、能力の自己評価については調査手法としての限界があること(安達 2001)、高校生を対象とした調査であるため未だ経験していない事柄については、遂行可能性に対する自己認知を問う自己効力感の考え方をを用いて測定するのが妥当であるとしており、本論文でもこれにならない生徒の「自己効力感」を測定する。

第2節 本論文の目的と構成

本論文の目的は、高校での地域と連携したキャリア教育を経て「自己効力感」が向上することは、生徒の将来への意識や行動にも影響するという仮説に基づき、3年間を通した必修の「キャリア教育プログラム」で、生徒の自己効力感がどのようにあがるのか、生徒はどのように地域の社会人と関わったのかを確認することで、より効果的な地域の社会人の介入方法について検討することである。

そのために、先行研究と先行調査の整理、カリキュラムを自己効力感の情報源として分類し、学校へのインタビュー、生徒へのアンケート調査を実施した。これらの結果を踏まえた考察を行い、本研究の目的を達成する。

本論文の構成は、第1章で本研究の背景と問題意識、本研究の目的について述べ、第2章では、高校でのキャリア教育における課題(第1節)、総合学科における「産業社会と人間」とキャリア教育(第2節)の2つから、キャリア教育における課題を整理する。

第3章では,自己効力感とは何か(第1節)を説明し,高校生の自己効力感の現状について(第2節),地域での自己効力感について(第3節)詳述する.

第4章では,調査の概要を述べる.第1節では調査対象校の概要について述べ,第2節では飯南高校のカリキュラムの特徴について詳述し,第3節では先行調査の概要について述べる.第4節では調査対象と調査方法について説明し,第5節では調査結果を述べる.

最後に,第5章では,考察(第1節)と今後に向けた研究の課題(第2節)を述べる.

第2章 キャリア教育における課題

第1節 高校でのキャリア教育における課題

本節では、キャリア教育における課題を整理する。

我が国で「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、1999 年 12 月の、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。「(前略)『キャリア教育』とは、『一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育』である。(後略)」(中央教育審議会 2011,P.16)と定義され、キャリア教育で育成すべき能力や態度として、2011 年 1 月にとりまとめられた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」にて、4 つの能力によって構成される「基礎的・汎用的能力」について示された。

表1に示す 4 つの能力は、包括的な能力概念であり、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。特に順序があるものではなく、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではないことが、中央教育審議会(2011)で述べられている。

表 1 :基礎的・汎用的能力について

基礎的・汎用的能力	概要	具体的要素
人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力	他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力	自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力	情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等

文部科学省、高等学校キャリア教育の手引き 第 1 章第 1 節キャリア教育の必要性と意義(その 3)、P. 21-22 をもとに筆者作成。

キャリア教育が必要とされる背景には、社会環境の変化により学校から社会への移行が困難になっていることや高学歴社会の中で子どもたちが将来の進路選択を先送りにする傾向が強まっていることなどが挙げられ、このため学校は子どもたちが「生きる力」を身につけ自立した社会人となるために必要な教育を行う必要がある。

高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書(2006)によると、普通科の進路指導は、以下のような現状にあり、キャリア教育を進めていく上で、様々な課題があると考えられる。

① ホームルーム活動における進路学習の状況

進路指導を補充・深化・統合する場としてのホームルーム活動における学習は、普通科にあつては、これに充てる授業時間数が卒業学年に偏っている。また、その内容は、進路の選択決定やその実現にかかわる事柄に偏っている。

これに対して、普通科の生徒及び卒業生は、自己理解や将来の生き方、あるいは社会参加にかかわる知識や資質に関する学習を求めている。

② 将来の生き方や進路にかかわる体験活動の実施状況

キャリア教育において重要とされている体験活動について、普通科の実施状況を、生徒が体験した活動から見ると、各大学主催の「オープンキャンパス」の体験率が極端に高い割合となっている。このことに象徴されるように、普通科の体験活動は「当面する進路選択にかかわる体験活動」に偏っている。これに対して卒業生は「インターンシップ」「職場の見学」「卒業生の体験発表」といった、将来の生き方や社会参加にかかわる体験活動の実施を求めている。[1]

中央教育審議会(2011)の中でも、以下のような課題が示されている。

③ キャリア教育の定義認識のあいまいさ

「(前略)キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実際の成果も徐々に上がっている。しかしながら、『新しい教育活動を指すものではない』としてきたことにより、従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、『体験活動が重要』という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準に、ばらつきのあることも課題としてうかがえる。このような状況の背景には、キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯が十分に整理されてこなかったことも一因となっていると考えられる。このため、今後、上述のようなキャリア教育の本来の理念に立ち返った理解を共有していくことが重要である。(後略)」(中央教育審議会 2011,P.17-18)とされるように、ただ体験活動をすればいいということではなく、キャリア教育と職業教育の混同を整理する必要性があると考ええる。

また、働くことへのネガティブなイメージとロールモデルの多様性が探究学習・キャリア教育の効果に影響する可能性があることを示唆し、多様な大人との出会いや体験がネガティブなイメージを変え、より探究学習・キャリア教育の効果を高めると考えられる(奥山,小西 2024)。

④探究学習に関する知見の不十分さ

文部科学省は、総合的な学習(探究)の時間は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしており、2018年に改訂された高校の学習指導要領では、社会への出口に近い高等学校では生徒が自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを社会から求められていることから、「総合的な学習の時間」を、より探究的な学びを強調し「総合的な探究の時間」と改めた。

リクルート進学総研が、高校の教育改革に関する現状を明らかにするため、全国の全日制高校に対して 2022 年に行った、新学習指導要領,ICT 活用,キャリア教育,進路指導,学校改革等の取り組みに関する調査「高校教育改革に関する調査」によると、キャリア教育を実施する時間は「総合的な探究(学習)の時間」が 77.6%でトップである。

しかし、国内において、探究学習に関する知見はまだ十分なものとは言えず(村山 2013)、現在も各学校が試行錯誤して取り組んでいるのが実態である。その理由として、従来の授業とは異なり学力が維持できるのかの不安感や、探究学習の成果が示されづらいこと、教え込む授業がスタンダードになっている現状などがあると考えられる(村上 2012)。

また、日本商工会議所が 2016 年に、全国の 515 商工会議所に対して行った「教育支援・協力活動に関するアンケート調査」では、教育支援・協力活動の実施目的として、「学生の職業観の醸成」が最も多く(55.0%)、次いで「地元学生の地元企業への就職促進」(40.3%)、「教育機関との連携強化」(32.5%)の順で、Uターン・Iターンを目的に実施した事業も約 1 割(9.6%)あった。

企業が学校に関わるキャリア教育の形は少なくないが、後述する通り学校現場では外部連携に関する課題が多くある。

学校が抱える課題として、探究学習に関わる学校では、年を追うごとに課題感が増していく傾向にあったのが、「外部との連携・協働」「調べ学習で終わってしまう」「進路との接続」「生徒が設定したテーマの知識・人脈がない」といった、より生徒一人ひとりに個別最適化させた深い学びの実現に関する課題である。特に図1の示す通り「外部との連携・協働」に関しては 1 年目と 6 年目以上で約 20%増加しており、増加傾向が顕著に見られている。[2]

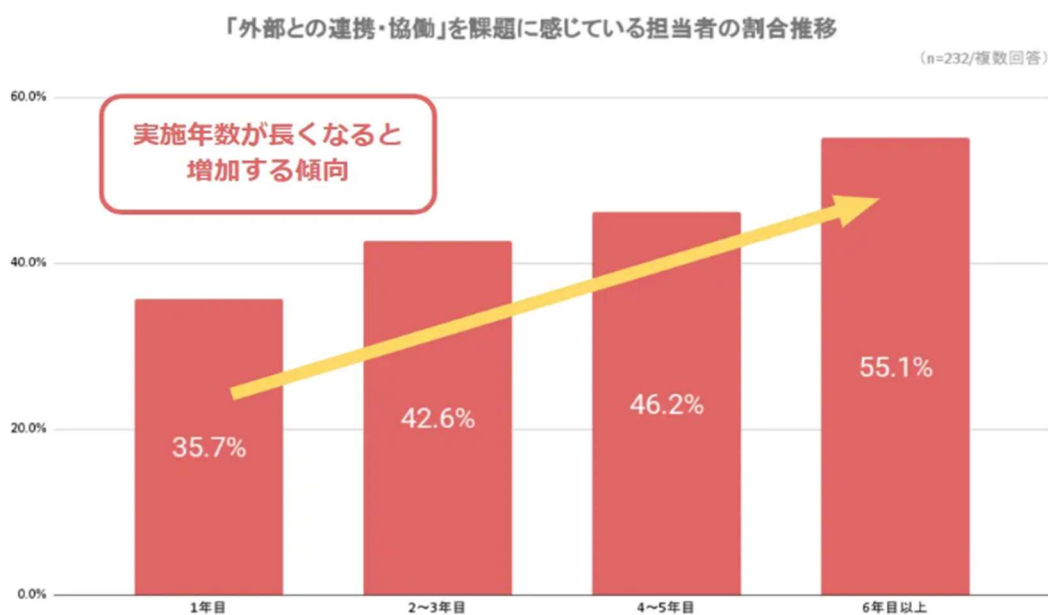


図 1: 認定特定非営利活動法人カタリバ, 探究学習の推進における課題, 2023 より抜粋

第2節 総合学科における, 産業社会と人間とキャリア教育

次に, 総合学科におけるキャリア教育の位置づけや取り組みについて確認する。

「高等学校には, 普通科, 専門学科及び総合学科がある。これらの別を問わず全ての学科に, 総合的な学習の時間が創設されて以来, この時間において自己の在り方生き方や進路について考察する学習の充実に取り組んできた。(中略) 総合学科において原則履修科目とされている, 自己の在り方生き方や進路について考察する学習である『産業社会と人間』などの取組も参考にしながら, 一層の充実に向けて実践を重ねてきている。(中略) 産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ, 社会に積極的に寄与し, 生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うといったことをねらいとする『産業社会と人間』を全ての生徒に原則として入学年次に履修させることとされているが, この『産業社会と人間』の目標, 内容は, 総合的な探究の時間と共通する面を有していると考えられる。したがって, 総合的な探究の時間においては, 『産業社会と人間と総合的な探究の時間を関連付け, キャリア教育の柱として意図的計画的な指導を行うことも考えられる。』(文部科学省,【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説,P.77-78)

「総合学科における『産業社会と人間』は、人間としての生き方の探求、特に自己の生き方の探求を通して、職業を選択し、決定する場合に必要な能力と態度を養うとともに、将来の職業生活を営む上で必要な態度やコミュニケーションの能力を培うことや現実の産業社会やその中で自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度を育成することをねらいとしている。このねらいを達成するため、各学校では、社会人や地域の有識者を講師とするなど地域との積極的な連携を図り、実習、見学、調査研究などの体験的な活動を取り入れた学習を展開してきている。また、『産業社会と人間』の学習は、自らの進路等を考慮した適切な各教科・科目の選択能力の育成にも大きな役割を果たしている。」(文部科学省,【総則編】高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説,P.69)

以上の通り,高校の中でキャリア教育とその取り組みとしての社会との接続(キャリア教育における外部連携)は重要であると考えられているものの,キャリア教育の意義・意味の理解不足や,知見不足,外部連携については課題が多い。

答申では,「各学校のキャリア教育の基本的な在り方を内外に示すとともに、学校の特色や教育目標に基づいて教育課程に明確に位置付けるべきであり、これらを通じて、全体的な方針や計画を明らかにしておくことが必要である。」(文部科学省,中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」<抜粋>)としており,各学校がそれぞれにキャリア教育の基本的な在り方を内外に示す必要性について述べている。

高校生におけるキャリア教育で,社会と接続し,高校生の基礎的・汎用的能力を育成するということは,高校生が今後社会の中で生きていく「自信」を育むことといえるのではないかと,第3章では,自己効力感について解説する。

第3章 自己効力感とは

第1節 自己効力感について

第1章でも述べたように、自己効力感とは、「ある行動をきちんと遂行できるかどうかという見通しや予想」(Bandura, 1977)と定義され、課題遂行のために必要な技能を持っているかいないかにこだわらず、出来ると思うかどうかを問うものである。

自己効力感 は行動に直接的に影響を与えると仮定されており、ある特定の課題に対する自己効力感が高ければ、その課題に対して頻繁に働きかけ、それが良い結果にもつながり、逆に自己効力感が低いと、課題に応じた行動を避けるようになり、従って得られる結果のレベルも落ちることが予測される。

自己効力感を得る主要な情報源としては、「**遂行行動の達成(達成経験)**」「**代理的経験**」「**言語的説得(社会的説得)**」「**情動的喚起(生理的喚起)**」の4つがある。

「**遂行行動の達成(達成経験)**」とは、自分自身である行動を遂行し、成功することにより得られるものであり、最も強く安定的とされている(江本 2000)。逆に遂行行動が達成できなかった場合にはネガティブな影響を得ることもある。

「**代理的経験**」とは、自分以外のモデルの遂行とその結果を観察して得られるものであり、他者の観察を通して、自身が代理的に経験するようなことである。

「**言語的説得(社会的説得)**」とは、文字通り言語によって成功するという暗示をかけるものである。例えば、他者により言語的にほめられること、励まされることや、自身で自身を励ますようなことである。また、逆に批判されることにより、ネガティブな影響を得ることもある。

「**情動的喚起(生理的喚起)**」とは、生理状態によって自己効力感が影響を受けるというもので、緊張したりしている時には、冷静な時に比べて効力感が低まるとしている(Bandura, 1977)。

こうした理論は、キャリア意思決定における社会的学習理論(Krumboltz, 1979)や、キャリア自己効力(Hacket & Betz, 1981)など、キャリア研究者によってキャリアの分野にも多く適用されている。

第2節 高校生の自己効力感の現状

辰巳(2011)は、これまでのキャリアに関する自己効力感の研究の中心は、「進路」に関するものであったが、海外ではキャリアを「ライフキャリア」として包括的に捉えた「学校から社会への円滑な移行を促進するガイダンスコンピテンシーに対する自己効力感尺度(Guidance Competency Self-Efficacy Scales:GCSS)」(Lapin, Gysbers, Multon & Pike (1997))などが登場していると説明している。

また、自己効力感とはキャリア発達においても重要な役割を果たすことが指摘され、たとえば、職場体験における仕事の遂行と成功、職場で働く職業人の観察、職業人との対話といった個々の経験を、それぞれ「遂行行動の達成」、「代理的経験」、「言語的説得(社会的説得)」として捉え、これらによって体験した職業内容に関する自己効力が高まると考えることができよう(吉田 2009)。

しかし、日本ではキャリア教育で他者との関係構築などが重視されているにも拘わらず GCSS のような包括的な自己効力感の測定はこれまで検討が進まず、国内におけるキャリア自己効力感とは、進路選択の過程を測定するにとどまっており(浦上 1995, 永作・新井 2002, 富永 2006 など)、対人能力がその後のキャリアプランニングにどのように影響するかという視点では議論は進んでいないことを辰巳(2011)は指摘している。

山田(2008)は中学生の職場体験直前直後に実施した調査から、「対人スキルは職場体験満足度を媒介して、進路関連自己効力感の変容に間接的に正の影響を与える」ことを示しており、つまり対人スキルの高い生徒は体験先での人間関係構築が円滑に進むことで職場体験の満足度が上がり、それが進路関連自己効力感の向上に寄与していると結論づけている。

更に、菰田(2008)は中学生の職場体験前後の自己効力感の変化に職場体験における評価が大きな影響を与えており、体験先の仕事や体験先の職場の雰囲気などにおいて、中学生自身がよい印象を得ること、つまり成功体験が自己効力感の向上に有効であると考えられるとしている。また、下村(2008)の調査では、中学生の職場体験の感想から「明瞭化」「理解」「情動」のいずれの因子でも職場体験前後の自信の変化に影響を与えており、特に自分の将来の目標が明確になったなどの「明瞭化」の因子の値が大きいほど「進学」「就職」「人生」のいずれの自信の

変化も大きくなることが明らかとなり、ポジティブな感想をもつ生徒では職場体験後の自信の値が大きく、ネガティブな感想をもつ生徒では職場体験後の自信の値は大きくならなかった。

ベネッセ教育総合研究所の調査では、「自己効力感」が高い子どもは、壁を乗り越えることに成功する体験や、自分で決める経験を積み重ねており、自分に対する自信(自己肯定感)や、他者から信頼されている感覚(他者受容感)を持っていることが明らかとなり(ベネッセ教育総合研究所 2015)、溝上他は、大学・社会で成長する高校生の特徴として、授業外学習を行っていること、豊かな対人関係を築いていること、キャリア意識を持っていることを指摘している(溝上他『どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ』、学事出版、2015)。

このように、他者との関係構築や遂行行動の達成(達成経験)等を通した中高生の自己効力感向上については可能性が示唆されているが、その検討について十分とはいえない。

これを踏まえ、高校生の地域と連携したキャリア教育を通しての自己効力感を確認するにあたり、高校生は地域の社会人とのどのような関わりを持っているのかについて明らかにする必要があると考える。

第3節 地域での自己効力感

社会との連携と言いつても、「社会」という言葉が示す範囲の認識はそれぞれであり、高校における社会との接続においては「地域」という言葉がよく用いられている。

地域との関わりによる自己効力感について、片岡・石山(2018)は、明確な目的をもち交流する「目的交流型サードプレイス志向」、社交を主な目的とする「社交的交流型サードプレイス志向」、個人が居心地よく過ごす「マイプレイス型サードプレイス志向」にサードプレイス志向を分け、離職期間有無によるサードプレイス志向や地域での活動から生じる個人の自信を意味する地域

自己効力感は「地域自己効力感(課題特異的)」と「地域自己効力感(一般性)」に分けて設定し、地域コミットメントに影響の違いを調査した。

結果、離職期間の有無にかかわらずサードプレイス志向が地域自己効力感を介し地域コミットメントに正の影響を及ぼすことが明らかとなり、離職期間を経験した者は交流型の利用が、離職期間を経験していない者は交流型とマイプレイス型のバランスの良い利用が有益であることが明らかとなった。

これは、自信を無くしている対象には、交流型サードプレイスが地域での活動から生じる個人の自信を高めると示唆され、高校生と地域の人との交流による影響として期待できる項目ではないか。

また、島根県立隠岐島前高等学校では、地域唯一の高校である隠岐島前高校が生徒数の減少により廃校の危機を迎えたことをきっかけに、地域と学校が協働し、生徒が行きたくなる・保護者が行かせたくなる・地域が活かしたくなる・そんな「魅力的な学校をつくる」ことを目的とした「島前高校魅力化プロジェクト」が2008年に発足した。三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームとともに調査した結果をまとめたニュースリリース(2022)によると、取り組みを通じ生徒の資質・能力が向上したことが明らかとなった。

以上の現状や調査を踏まえ、以下3つの仮説を設定する。

仮説①地域と連携したキャリア教育を通して、高校生の自己効力感は向上させることができ、学年が上がるごとに情報源となる機会が蓄積することで上昇していく。

仮説②自己効力感の向上とともに、対人関係や将来展望への肯定的意識も向上する。

仮説③地域の社会人による、言語的説得(社会的説得)、遂行行動の達成(達成経験)、代理的经验、他者受容が生徒の自己効力感に影響する。

第4章では、調査の概要について述べる。

第4章 調査の概要

第1節 調査対象校の概要

今回は、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に採択され、採択期間の修了後、予算がなくなった後も仕組みを持続化させている三重県立飯南高等学校（以下、飯南高校）を、事例として、先行研究をもとに調査を行う。

「地域」の定義は、生徒の生活圏内とし広くは市内、狭義では学校がある町を指すこととし、社会人とは、個人事業・法人（営利非営利）を問わず、企業活動に従事する大人（経営者も含む）を指すこととする。

「キャリア」の定義については、文部科学省の示す通り、「キャリア教育」の「キャリア」を「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」ととらえることとし、ここでの「キャリアへの肯定的な意識」とは、学力育成や大学進学・就職だけではない「人間的な成長・能力と、可能性・意義」とする。

調査対象の概要

文部科学省「**地域との協働による高等学校教育改革推進事業**」は、島根県立隠岐島前高等学校の高校魅力化による人口増加の事例を参考とし、地域の将来を支える人材育成のための高校改革として地域に特化した項目①「ふるさと教育」など地域課題の解決を通じた探究的な学びを実現、②地域の協働体制を構築、③地域留学の推進地域の特性を活かし全国からの生徒受け入れを含む「まち・ひと・しごと創生基本方針 2019 について」等を基にして、平成 30 年 3 月に公示された新しい高等学校学習指導要領を踏まえ Society 5.0 の社会を地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するために、高等学校が自治体・高等教育機関・産業界等との協働によりコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進するものである。 採択期間は 3 年間で、採択校へは取組への補助金が支給される。

上記補助金を活用し、地方小規模校でありながら 2019 年度より 2021 年度まで、地域を巻き込んだ探究学習に取り組んでいる事例が飯南高校である。

飯南高校は表2の示す区分の中で地域魅力化型に採択された。地域魅力化型は、地域課題の解決等を通じた学習を各教科・科目や学校設定科目等において体系的に実施するためのカリキュラムを構築し、地域ならではの新しい価値を創造する人材を育成することを目的としている。

表2:地域との協働による高等学校教育改革推進事業の区分

【プロフェッショナル型】 地域の産業界等との連携・協働による実践的な職業教育を推進
【地域魅力化型】 地域課題の解決等を通じた学習カリキュラムを構築し、地域ならではの新しい価値を創造する人材を育成
【グローバル型】 グローバルな視点を持って地域を支えるリーダーを育成

今回の調査校として飯南高校を選定した理由は以下の通りである。

- ①文部科学省の方針が反映された補助金を活用しており、外部との連携、生徒の偏差値だけではない基礎学力以外の 21 世紀型スキルもといコンピテンシー(資質・能力)を育成することに特化した取組を行っている。
- ②学力も重要であるが、今回は基礎学力以外のコンピテンシー(資質・能力)に注目し、進学校や理系コース以外にも発展可能な知見を得るため、進学校や私立ではなく、やや自己効力感が低いと考えられる比較的偏差値の高くない進路多様校である飯南高校を選定した。偏差値は 39 であった。[8]
- ③学校としても「生きる力」の醸成に力をいれ、本事業を用いて継続的に取組可能な仕組化を行っている。

飯南高校は、三重県松阪市の人口 4,168 人規模(松阪市町別人口(住民基本台帳)令和 5 年 8 月データより)の飯南町に位置する。

総合学科であり、郷土・環境系列、介護福祉系列、総合進学系列、コンピュータ系列の 4 系列があり、生徒定員は 240 名である。参考として、表3では補助金採択 2 年次の学校全体の規模を示す。

学校の方針は以下の通りである。

教育方針

- (1) 授業を大切にし、授業の改善・充実に取り組みます。
- (2) 学校・社会のルールを守る規律指導を行います。
- (3) 地域の子どもたちの「生きる力」を地域ぐるみで育成し、地域の小中高が一貫したキャリア教育を推進します。[9]

表3:学校全体の規模

③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模
	1 年	2 年	3 年	4 年	計	
総合学科	77	79	79		235	全日制総合学科235名 1学年2クラス定員を3クラスに展開

文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第2年次より抜粋

今回、飯南高校が本事業を行った理由として、現状の分析と研究開発の仮説として、文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書には以下の内容が記載されている。

「総合学科の柱の3科目(「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「いいなんゼミ」)を再構築し、3年間の学びの連動を強化して地域課題解決型キャリア教育の充実を図る。また、4系列の特色を活かした地域貢献のための学習活動、各教科・科目での地域題材・データを扱った教科横断的な学習の実施により、日常的な学びと地域・社会との連動を企図する。(中略)本事業では、地域を学び場とした地域課題解決型のキャリア教育の実践を通じて、自ら考え挑戦し多様な価値観を持つ人々と対話・協働しながら、地域への愛着を持って地域に貢献し、地域の未来

を切り拓くことのできる、地域に根ざした人材を育成することを目的とする。その目的とする人材に必要な4つの資質・能力(対話力、追究力、創造力、発信力)を育成していくことを目的として取組を行った。(中略)飯南高校の所在する松阪市飯南町と連携型中高一貫教育を実施している中学校が所在する飯高町では、近年急激に人口減少が先行している。さらに今後も減少が拡大することが予想され、このままでは地域住民と学生が交流する機会の減少、文化・産業資源の継承が困難となるなど、地域の活力が低下し、地域と共に学校が共倒れになる可能性が高い。平成30年9月から本校が中心となって連携中学校と協働し、地域を若者で盛り上げて活性化していこうとする道の駅コラボプロジェクトを始めた。この取り組みを通して、地域活性化にかかる方向への地域からの期待は高まりを見せてきている。また、地域へ飛び出した活動が生徒の成長に有意義であることを教員集団と再確認する機会となった。しかし、この取り組みは生徒の有志活動であり、活動メンバーが一部に限定されたものであった。そこで、このような学びの場を生徒全員に提供し、学校の学習活動を地域と連動させていくことで、学校と地域が一体となって過疎化地域の将来を変えていくことに繋がるものと考え(後略)」(文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第2年次)

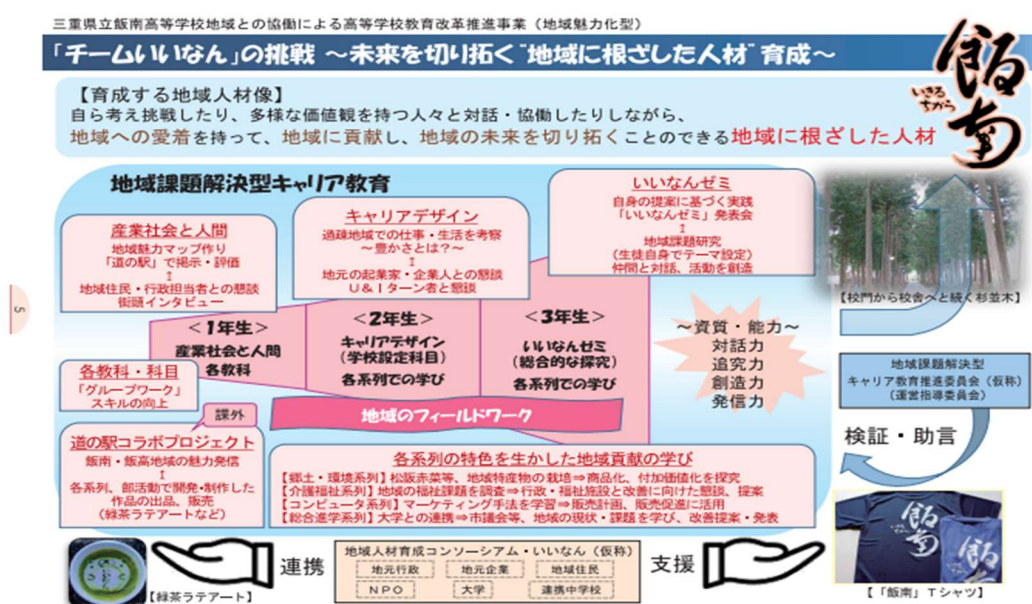


図2:飯南高校における本事業の全体像

文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第2年次より抜粋

1年次「産業社会と人間」(総合学科必修履修科目)では、地域へ飛び出したおよそ2回のフィールドワークを通して飯南町・飯高町の現状や課題を聞き取り、地域の魅力マップの作成や、将来の地域への提案を行う。

2年次「キャリアデザイン」(学校設定科目)では、地域の企業人、本気の大人との出会いを通じて、過疎地域での仕事や生活等の課題・魅力について考える。

3年次「いいなんゼミ」(総合的な探究の時間)では、1・2年次の活動で生まれた問題意識や課題について、地域課題研究ゼミを設置しながら、実践的で創造的な探究学習を行う。

その他、系列の特色を生かした活動やプロジェクトもあるが、今回は全校生徒が共通して体験している上記の1年次から3年次の地域課題解決型キャリア教育についてアンケートを用い調査する。

第2節 飯南高校のカリキュラムの特徴

飯南高校では、古いキャリア教育観を一新し、生徒と地域のコラボレーションによる生徒の成長を目的とし、補助金の有無に限らず2019年から「産業社会と人間」の改変を予定しており、以下のように改変を行った。

これまで1学期と2学期の2回を予定されていた4系列の学びを1つにし、キャリアインターンシップを1年次から2年次へ移動、5つの柱としてなかまづくりワークショップ、フィールドワーク①、キャンパスインターンシップ、4系列の学び、フィールドワーク②を設定した。

1年次の1学期に全員が地域へフィールドワークをおこない、生徒が2学期に向けて自分自身で仮説をたて実際の地域とのギャップを発見し、地域を自分事としたうえで、2年・3年次に自分で「関心のあるテーマ」を選び、適宜、教員や地域の方や専門家人材の協力も得ながら調査し、その内容をまとめプレゼンテーションを行う。

3年間の必修授業としてカリキュラム化されていることで、一過性の学びではなく1年から3年へと続いて、それぞれの系列での学びや、外部イベントの活用、キャリアとの結び付け、専門家とのマッチングなどを通して、他教科やキャリアにも越境していく仕組みが作られている。

学校として目指す学校と生徒の姿(育成する能力)が明確に示され、地域と共有されていることも今回の事例の特徴であり、表4にその取り組みの詳細を整理する。

また、飯南高校の外部人材の発掘と選定においての工夫として、土方清裕校長(当時[3])へのヒアリング[4]では、通常インターンシップが高校生と企業のはじめての接点となるが、学校としては高校生が先生ではない外部の大人と関わること(オンラインも含む)で親身な関わりや本気度に影響され、外との交流による比較や気づきから、生徒が成長をすることを期待し、土方清裕校長・松阪市飯南地域振興局 局長[5]が中心となり、コンソーシアムのメンバーやそのネットワークをもとに信頼のおける人物の紹介や自らの情報収集によって人材を発掘、校長自らが会いにいき「学校として生徒に身に着けてほしい力」を人材へ直接説明して、以下の大きく3つのポイントを重視しながら交渉や調整を進めていた。

- ・学校の方針への理解
- ・次世代への貢献意識
- ・高校生との関わりを楽しみ、新しい学びへの気づきを得るような姿勢

そして、それらの調整・コーディネートを行う教員やコンソーシアムメンバーら伴走者の工夫として、「高校生だから」という前提条件や期待値のズレなどをうまく調整することや、地域への愛着や誇りを育てるというズレが生じやすい大きな視点ではなく、より見えやすく感じやすい、わかりやすい目標に落とし込み、高校生だからこそ応援され、安心とチャレンジが成立するような関係づくりが意識されていた。

その他、校長は、仕組化することで魂が抜けていくこと、関わる人材の主体が落ちることも懸念する事項であった。としており、取り組みに対して地域の中でPDCAを回しながら、コンソーシアムや

地域で連携する人材など、複数人でフォローするという工夫も行っている。その結果として、学校と地域では、立場を越えた関係性ができたという。

表4:各学年の年間標準カリキュラム

	1 学期(4～7 月)	2 学期(9～12 月)	3 学期(1～3 月)
1 年次 「産業社会と人間」	◆なかまづくりワークショップ ◆地域フィールドワーク ◆魅力マップ模造紙の作成と掲示 ◆キャンパスインターンシップ, 個人発表	◆地域の方への聴き取り, 個人発表	◆かけ算プロジェクト, グループ発表 ◆ブレいいなんゼミ発表 会見学
2 年次 「キャリアデザイン」	◆問いの立て方ワークショップ ◆ブレいいなんゼミ ◆本気の大人講演会	◆インターンシップ ◆進路ガイダンス ◆本気の大人講演会 ◆企業交流会(商工会連合会主催で全員参加)	◆本気の大人講演会 ◆ブレいいなんゼミ発表 ◆進路ガイダンス
3 年次 「いいなんゼミ」	◆専門知識を持つ人とのマッチングや地域や企業とのコラボ ◆各自調査 ◆ゼミ内発表	◆各自調査 ◆ゼミ内発表	◆各自調査 ◆選抜発表 ◆ポスターセッション

文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第2年次を参考に筆者作成
年度により,実施時期や方法がやや異なることもある。[6]

表4の具体的な内容は以下の通りである。

1 年次

「産業社会と人間」

◆なかまづくりワークショップ

「高校3年間で有意義に過ごすための楽しい時間にする」を目標に「人に話しかける」「周りをみる」「仲間と助け合う」という3つの力を身に付けるべくチームビルディングのためのワークショップを実施。生徒からは,仲間の大切さや仲の深め方が学べ,楽しかった,というコメントがあった。

◆地域フィールドワーク

テーマの探索・地域理解を目的とした共通のインプット機会。地域を自分事として捉えることを目的にしている。生徒からは,楽しかった,地域の方が優しいという意見があり,地域の方の関わりや,解説により「興味関心の発見」や「知識のインプット」「励まし」などが得られ,地域で起こっていることを具体的にイメージできるようになっている。

◆魅力マップ模造紙の作成と掲示

得た情報や感じたことをチームで整理しまとめることで、学びの棚卸と整理ができた。地域の方が見学をし、そのアンケート結果を生徒にフィードバックすることで、自身の学びが人に影響を与えていることを生徒が実感した。

◆キャンパスインターンシップ,個人発表

自身で関心のある分野を選び、一年生のうちから短大や専門学校、大学などの見学を行った。得た情報や感じたことを整理しまとめ個人で発表を行った。学びの棚卸と整理ができた。

◆地域の方への聴き取り,個人発表

主体的な探究力の向上を目的に、前回訪問した地域について、自分達でテーマ設定をして調べ、そのうえでの不明点を地域の方から聞きとるなどのコミュニケーションをはかった。

ただ聞くだけではなく、why の追求や実際に体験を行うこともできた。

得た情報や感じたことを整理しまとめ個人で発表を行った。学びの棚卸と整理ができた。

◆かけ算プロジェクト

発信力を高めるため、フィールドワークで発見したことを他地域の事例、あるいは自身の興味・問いなどと比較し、特にアピールしたいことを「かけ算して伝える」という取組。かけ算の答えは全部正解ということを強調して伝え、まとめ活動の後には、6 グループにわかれ発表を行った。

◆プレいいなんゼミ発表会見学

先輩の発表を見ることで、自身の今後の取り組みについての具体的なイメージをもつことができ、先輩の姿や活動への期待・憧れの気持ちも芽生えた。

チームビルディングや、地域理解、発表経験を踏まえ、2 年次「キャリアデザイン」へ。

2 年次

「キャリアデザイン」

◆問いの立て方ワークショップ

ゲスト(大学教授)から、問いの立て方と、探究活動を自分事化できるよう目標設定のワークショップを実施した。

◆プレいいなんゼミ

3 年次のいいなんゼミの準備として、自身でテーマを設定し調査・まとめを行い、その内容をまとめてプレゼンを行った。3 年次に向けた事前準備ができたこと・発表の経験がついたことで、自信に繋がった。

◆本気の大人講演会

地域で仕事をもち、活動する大人の仕事や生き方について聞くことで、探究に対するモチベーションを醸成する。「憧れ」や、「発見」を得ることができた。

◆インターンシップ

過疎化地域でも仕事ができるということを伝えたく、就職希望者を対象に、地域の企業を中心としてインターンシップを実施。地域の仕事と社会人を知ること、地域の活力を感じることができた。

◆進路ガイダンス

それぞれの進路に合わせ、ゲストからの講話を行い理解を深める。

◆企業交流会(商工会連合会主催)※全員参加

合計 18 社の企業が参加。生徒が事前に交流希望企業を選び、交流を行った。

フィールドワークでお世話になった企業もあり、就職という観点から見ることによって改めて興味が湧くなど、就職の幅が広がったという場面や意見も見られた。企業理解に加え、比較による魅力発見に繋がった。

◆ブレいいなんゼミ発表

得た情報や感じたことを整理しまとめ個人で発表を行った。学びの棚卸と整理ができた。

問いの立て方、テーマ決定から調査、発表までのプロセス経験、社会人との交流によるキャリア観の醸成を踏まえ、3 年次「いいなんゼミ」へ。

3 年次

「いいなんゼミ」

◆専門知識を持つ人とのマッチングや地域や企業とのコラボ

テーマに対して、専門知識をもつ人を紹介してもらい、アポイント、説明、相談を行った。人に説明することで理解が深まり、自信がついた。自身の探究について、応援や協力を得ることができた。

◆各自調査

テーマについて、調査や相談、ディスカッションを行い進めた。

◆ゼミ内発表

自身でテーマを設定し調査・まとめを行い、その内容をまとめてプレゼンを行った。

発表の経験がついたことで、自信に繋がった。

◆ポスターセッション

自身でテーマを設定し調査・まとめを行い、その内容をまとめてプレゼンを行った。

発表の経験がついたことで、自信に繋がった。

また、生徒同士のフィードバックの工夫を行うことで学びをよりブラッシュアップすることができた。

◆選抜発表

設定したテーマについて調査・まとめを行い、その内容をまとめてプレゼンを行った。

選抜生徒に選ばれたこと、発表の経験がついたことで、自信に繋がった。

また、お世話になった方を招き、広くフィードバックを得ることで学びをよりブラッシュアップすることができた。

卒業生へのインタビュー[7]からも、「高校時代の周りの人は地域や学校を良くしようと、他の人や何かのために動いていた。」「思いを否定せずに丁寧に、肯定的な雰囲気をつくってくれたので自信が持てやりたいことに対し幅を広げることができた。」など表5のような意識の変化が見られ(卒業生インタビューより)、このカリキュラムでの出会いや経験が、自身のキャリアや対人能力に影響を与えたことがうかがえる。

表5:自身の気持ちや能力などの変化についての卒業生インタビュー

入学時	卒業後
都会に出ないとやりたいことはやれない. やりたいのはこれ,と決めつけていた. 大人も自分も信頼せず自信がなかった. 期待されていないと思っていた.	地域と関わる経験から対人能力向上. 自信になり人と関わる仕事を選んだ. 地域の人との信頼関係を気づくことで変 わらぬ人間関係や活動支援が続いている.

自己効力感とは,2章のとおり,能力に関係なく自分がある状況において必要な行動をうまく遂行できると,自分の可能性を認知していることである.自己効力感は,表6に示すような情報源を通して変容させることが出来るとされており,中でも遂行行動の達成(達成経験)が一番強く安定したものになると考えられている(池辺,三國 2014).

表6:自己効力感の情報源

情報源	概要
遂行行動の達成 (達成経験)	思考プロセスが行動をコントロールすることで行動達成が導かれる
言語的説得 (社会的説得)	成功できると思わされるような励ましなど
代理的経験	他者の体験を見本にする
情動的喚起 (生理的喚起)	行動に伴う身体的な刺激や反応,感情,気分

江本(2000)を参考に,筆者作成

表7では,飯南高校の教諭と議論のうえ,飯南高校のカリキュラムを情報源に分類・整理した.

生徒全員が一律に共通して経験する機会は黒,経験する生徒が限定的なものはグレー,その中でも地域の社会人との接点があるものにはアンダーラインで区別し記載した.

表7:自己効力感の情報源とカリキュラムの関連

	1 年	2 年	3 年
遂行行動の達成（達成経験）	<ul style="list-style-type: none"> ・かけ算プロジェクト ・<u>魅力マップ模造紙の作成と掲示</u> ・<u>地域の方への聴き取り</u>, 個人発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレいいなんゼミ ・<u>インターンシップ</u> ・問いの立て方ワークショップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自調査 ・<u>専門知識を持つ人とのマッチングや地域や企業とのコラボ</u> ・ゼミ内発表 ・<u>選抜発表</u> ・ポスターセッション
言語的説得（社会的説得）	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>地域フィールドワーク</u> ・<u>魅力マップ模造紙の作成と掲示</u> ・<u>地域の方への聴き取り</u>, 個人発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレいいなんゼミ 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自調査 ・選抜発表 ・<u>専門知識を持つ人とのマッチングや地域や企業とのコラボ</u> ・ポスターセッション
代理的经验	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>地域の方への聴き取り</u>, 個人発表 ・キャンパスインターンシップ, 個人発表 ・<u>本気の大人講演会</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>本気の大人講演会</u> ・<u>企業交流会</u> ・<u>進路ガイダンス</u> ・<u>インターンシップ</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自調査 ・ゼミ内発表 ・<u>専門知識を持つ人とのマッチングや地域や企業とのコラボ</u>
情動的喚起（生理的喚起）	<ul style="list-style-type: none"> ・かけ算プロジェクト ・地域フィールドワーク ・<u>魅力マップ模造紙の作成と掲示</u> ・<u>地域の方への聴き取り</u>, 個人発表 ・なかまづくりワークショップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>インターンシップ</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自調査 ・<u>選抜発表</u>

第3節 先行調査の概要

ここで、飯南高校の取組についての先行調査を確認しておく。

飯南高校が取り組んだ、文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（地域魅力化型）における管理機関である三重県教育委員会は、卒業までに生徒に取得させる具体的能力の定着状況を図るものとして飯南高校との協議の上で、事業を通じて実現する成果目標を設定し、この目標を図るために学期ごと（1 学期 7 月, 2 学期 12 月, 3 学期 3 月）で「地域との協働を考えるアンケート」を実施した。

アンケートの質問項目は、以下の 8 つである。

問1: (地域の人々と対話する際、) 相手の思いや考えを理解しながら聴いたり、自分の知りたいことを詳しく尋ねたりする力は身に付きましたか。

問2: (地域の産業などについて) 詳しく知ら寝たり、課題や改善点を発見したりする力は身に付きましたか。

問3: 仲間とともに、(地域課題の解決に向けた) 取組や活動を考えたり、実行したりする力は身に付きましたか。

問4: (地域課題を解決するための) 具体的な考えや提案を、地域の人々をはじめとした様々な人によくわかってもらえるように伝える(プレゼンする)力は身に付きましたか。

問5: 将来的に松阪市に住みたいと考えていますか。

問6: 将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考えていますか。

問7: 今現在のあなたの飯南・飯高地域への「愛着や関心」について回答してください。

問8: 今現在のあなたの「挑戦力」について回答してください。

「(前略)8 つについて質問し、問 1～問 6 については 4 段階評価、問 7～8 については 5 つの選択肢を用意し 5 段階評価を行った。いずれも数値が低いほど低評価、高いほど高評価となっている。なお、『地域』と設問に記載すると学校活動全般で力がついたかどうか、計ることができないのではないかという意見あり、それは本意ではないため、令和 2 年度は問 1～4 において『地域』という言葉を外して質問した。」(文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第 2 年次 P.59)

表8は、令和元年度(1 学期 7 月, 2 学期 12 月, 3 学期 3 月に)と令和 2 年度(1 学期 7 月, 2 学期 12 月)に実施したアンケートの結果である。各項目は上述した目標値に対し、それぞれ全体に対する割合(%)と、人数(斜体)で示され、実施当初から 10 ポイント以上上昇した数値については太字で表記されている。」(文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第 2 年次 P.59)

表8:地域との協働を考えるアンケート

<1学年>

項目	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E-D
①対話力	85.1	80.0	-5.10
①追究力	75.7	69.3	-6.34
①創造力	86.5	80.0	-6.49
①発信力	48.6	58.7	10. 02
①全て	37.8	44.0	6.16
①全て人数	28 人	33 人	5 人
②	55.7	53.4	-2.29
③	9 人	9 人	0 人
④地域	16.9	8.2	-8.68
④アントレ	42.3	43.8	1.58

<2学年>

項目	19 年 1学期(A)	19 年 2学期(B)	19 年 3学期(C)	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E-A
①対話力	58.2	73.7	76.0	76.4	80.8	22. 54
①追究力	59.5	61.3	86.7	80.6	76.6	17. 13
①創造力	65.8	64.5	77.3	75.0	71.8	5.97
①発信力	41.3	60.0	76.0	58.3	76.6	35. 29
①全て	29.3	37.3	49.3	41.7	46.8	17. 42
①全て人数	22 人	28 人	37 人	30 人	36 人	14人
②	55.1	47.2	56.3	53.5	58.7	3.54
③	15 人	10 人	18 人	8 人	10 人	-5 人
④地域	13.2	14.1	29.2	15.5	13.3	0.18
④アントレ	35.4	37.0	51.4	45.1	44.0	8.56

<3学年>

項目	19 年 1学期(A)	19 年 2学期(B)	19 年 3学期(C)	20 年 1学期(D)	20 年 2学期(E)	E-A
①対話力	51.3	49.4	64.9	77.3	72.4	21. 05
①追究力	47.4	49.4	61.0	78.7	80.0	32. 63
①創造力	50.6	57.1	62.3	68.0	76.3	25. 67
①発信力	35.5	44.2	52.0	53.3	63.2	27. 63
①全て	14.5	18.2	26.7	28.0	38.7	24. 19
①全て人数	11 人	14 人	20 人	21 人	29 人	18人
②	65.3	65.8	62.7	62.5	58.7	-6.67
③	16 人	12 人	14 人	11 人	10 人	-6 人
④地域	12.3	16.0	14.7	6.8	9.5	-2.87
④アントレ	43.2	32.9	42.7	50.0	37.3	-5.91

- ①～④は、以下のとおり目標値として設定された項目である。
- ①対話力・追求力・創造力・発信力の4つの能力が身に付いたと考える生徒の割合
問1,問2,問3,問4に該当
 - ②将来的に松阪市に住みたいと考える生徒の割合
問5に該当
 - ③将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考える生徒の人数
問6に該当
 - ④「地域アイデンティティ」と「アントレプレナーシップ」に関する自己評価における肯定的評価
問7,問8に該当

「(前略)まず、昨年度からこの事業を継続している2学年のデータを見ると、『対話力・追求力・想像力・発信力の4つの能力が身に付いたと考える生徒の割合』は、1年1月期 29.3%(22人)→2年2学期 46.8%(36人)と上昇した。目標値は85%以上で現状は遠く及ばないものの、4つの力全てが身についたと実感する生徒が増加している。

また、4つの力を個別に見ても、**対話力 22.54%増(80.8%)、追求力 17.13% 増(76.6%)、想像力 5.97% 増(71.8%)、発信力 35.29% 増(76.6%)**と高い数値で向上していることがわかる。特に対話力および発信力については、プレゼン発表する時間が『産業社会と人間』と『キャリアデザイン』においてほぼ毎学期、さらには系列授業でも何度かあり、その活動を通じて力が身についたと考えられる。そして生徒アンケートからは、『これから必要になってくる力』と肯定的に捉えていることもわかる。

全体的な傾向として、1年3学期から2年1学期にかけて数値は減少するが、オンライン授業は行われたものの、臨時休業期間で学校活動が断絶したことが影響しているのかもしれない。

この校内での4つの力に関するデータについては、三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングが行った『高校魅力化アンケート』の結果からも同様のことが言える。

このアンケートにある学校活動(明示的なカリキュラム)、生徒の自己認識(資質・能力の主観的認識)、生徒の行動実績(資質・能力の発揮)に関する51項目すべてが昨年度より上昇している。特に、『友達の前で自分の意見を発表することは得意だ』の項目では47.9%の生徒が昨年度より上昇したと回答しており、発信力との親和性がある。また、『地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい』の項目で40.8%の生徒が上昇回答していることは、これまでの校外を学びの場とした活動が地域社会に参画する意識を高めていると考えられる。

一方で、『将来的に松阪市に住みたいと考える生徒の割合』は横ばい(55.1% →58.7%) であり、『将来的に飯南・飯高地域に住みたいと考える生徒の人数』は 15 人から 10 人と減少した。さらに、地域アイデンティティの項目も 13.2%→14.1%→29.2%→ 15.5%→13.3%と減少傾向にある。生徒の記述からは、『まだこの地域についてあまり知らない』や『もっと知りたい』といった肯定的な意見を持ちながらも数値が低い生徒は見受けられるが、『興味がない』や『関心がない』と言った意見も少なからずあった。地域社会に参画したいという意識は高まったと言えるが、飯南・飯高地域を一層学んでみたい、より良い方向に変えていきたいという考えまでには至っていないと言える。(後略)」(文部科学省指定事業 令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第2年次 P.61-62)

この調査から、生徒は「産業社会と人間」と「キャリアデザイン」においてほぼ毎学期に実施されるプレゼンテーション、その活動を通し対話力・発信力が身についたと考えられ、地域への愛着心や関心については課題が残ることがわかった。

情報源の観点からは、プレゼンテーションにより遂行行動の達成(達成経験)を得て自信がついたのではないかと考えられる。

地域への愛着心や関心については、具体的な地域との関わりや、生徒が関わった社会人の関わり方についてどう感じているのかについてアンケートからは確認ができなかった。

そこで、本論文のアンケート調査では地域の社会人の関わり方について具体的に確認する。

第4節 調査対象と調査方法

飯南高校全校生徒を対象として、googleform を用いたアンケートを実施した。

学年ごとに任意の授業内で、事前の注意事項をアナウンスした動画を視聴後、端末で回答をおこなった。

実施期間は、以下の通りである。

第一回目:2023 年 9 月 6 日～9 月 13 日, 第二回目:2024 年 2 月 22 日～2 月 27 日

第一回目の回答者は, 186 人(1 年 57 名,2 年 60 名,3 年 69 名),有効回答数 147 人(1 年 44 名,2 年 51 名,3 年 52 名). 第二回目の回答者は,184 人(1 年 62 名,2 年 56 名,3 年 66 名),有効回答数 148 人(1 年 54 名,2 年 41 名,3 年 53 名)であった.

生徒のバックグラウンドや属性を把握するため,性別や出身,進路,系列,入学前のイベント参加回数などについてたずねた. 表9では,N 数に対しての回答割合を求め,小数点以下第二位に四捨五入して示す.

表9：生徒の属性

		第一回目調査				第二回目調査			
		全体 N=147	1年 N=44	2年 N=51	3年 N=52	全体 N=148	1年 N=54	2年 N=41	3年 N=53
性別(%)	男性	62.59	65.91	60.78	61.54	63.51	22.22	51.22	64.15
	女性	31.29	25	35.29	32.69	33.11	72.22	48.78	32.08
	無回答	6.12	9.09	3.92	5.77	3.38	5.56	0	3.77
系列(%)	コンピュータ系列	17.01	2.27	23.53	23.08	18.92	3.7	29.27	26.42
	郷土・環境系列	23.13	6.82	27.45	32.69	18.24	5.56	24.39	26.42
	総合進学系列	12.93	0	23.53	13.46	17.57	7.41	24.39	22.64
	介護福祉系列	19.05	0	25.49	28.85	14.86	0	21.95	24.53
	1年のため系列未登録	27.89	90.91	0	1.92	30.41	83.33	0	0
現時点での進路希望(%)	進学	27.21	13.64	37.25	28.85	56.08	53.7	46.34	66.04
	就職	50.34	36.36	47.06	65.38	28.38	14.81	43.9	30.19
	未定	20.41	50	11.76	3.85	10.81	27.78	2.44	0
	その他記述（無回答含む）	3	0	3.92	1.92	4.73	3.7	7.32	3.77
出身、もしくは居住地(%)	松阪市以外	19.73	18.18	25.49	15.38	15.54	16.67	17.07	13.21
	飯南、飯高エリア以外の松阪市	61.9	70.45	56.86	59.62	62.16	66.67	58.54	60.38
	飯南、飯高エリア	18.37	11.36	17.65	25	20.27	11.11	24.39	26.42
	その他（無回答含む）	0	0	0	0	2.03	5.56	0	0
入学前に、学校授業外の活動で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験(%)	参加したことがない	65.31	59.09	64.71	71.15	62.84	68.52	56.1	62.26
	おおよそ1~4回程度参加したことがある	25.17	29.55	25.49	21.15	33.11	29.63	31.71	37.74
	おおよそ4~9回程度参加したことがある	6.12	6.82	7.84	3.85	2.03	0	7.32	0
	おおよそ10回以上参加したことがある	3.4	4.55	1.96	3.85	2.03	1.85	4.88	0
飯南高校在学中において、学校授業外の活動で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験(%)	参加したことがない	53.74	65.91	52.94	44.23	68.24	75.93	58.54	67.92
	おおよそ1~4回程度参加したことがある	38.1	31.82	35.29	46.15	23.65	20.37	29.27	22.64
	おおよそ4~9回程度参加したことがある	5.44	0	9.8	5.77	4.05	0	9.76	3.77
	おおよそ10回以上参加したことがある	2.72	2.27	1.96	3.85	2.03	1.85	2.44	1.89

自己効力感については一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野ら 1986)を参考に,高校生にアンケート項目の言葉が伝わるよう飯南高校の教諭と相談の上文言の編集を行い,「はい」,「いいえ」の 2 件法で自己効力感得点を測定した.

また,飯南高校におけるカリキュラム,自己効力感の情報源(遂行行動の達成(達成経験),「代理的经验,言語的説得(社会的説得),情動的喚起(生理的喚起)」を参考に,どのような人との関わりが印象に残っているのかについて,地域の社会人とどのように関わったのかを選択式で確認し,生徒がどのようなカリキュラムの場面で自身の成長を実感しているのかについて,選択式で確認した.

今回確認したいライフキャリアの観点での効力感をみるため,基礎的・汎用的能力に関する能力の自己認識についても確認するため,「基礎的・汎用的能力(人間関係形成・社会形成能力,自己理解・自己管理能力,課題対応能力,キャリアプランニング能力)」(中央教育審議会 2011)や学校が定義する生きる力などを参考に行動変容のイメージを筆者が以下の様に作成し,それに基づき質問項目を作成し「そうは思わない(1)」から「とてもそう思う(5)」までの 5 件法での回答とした.(表10-1から表10-3)

表10-1: 参考項目と本調査の比較(自己効力感に関する項目)

論文	一般性自己効力感尺度 (坂野 1986)	キャリア教育を通じた生徒の成長—3 年間の縦断調査による自己効力感の変化—(辰巳 2011)	子どもとの相互関係における中・高校生の社会的自己効力感の発達(伊藤 2003)	本論文
対象	心身ともに健康な男女大学生 (18 歳 ~21 歳) 278 名	地方都市の公立高校 (進学校) 全校生徒のうち 2008 年の第 1 回調査で 1 年生であった生徒 199 名 ※文部科学省の「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究 平成 19 年~21 年」指定で実施された「キャリア発達に関する縦断調査」の一部を活用	東京都及び千葉県 国公立中学 3 校 1~3 年生 659 名, 公立高校 3 校 1~3 年生 774 名	三重県立飯南高等学校 1~3 年生 一回目 186 名 二回目 184 名
目的	個人の行動に長期的に影響を及ぼす認知された self-efficacy (自己効力感) の強さを査定するためのスケールを作成すること.	ライフキャリアの視点から生徒の高校 3 年間の自己効力感の変化を実証的に検討し, その要因間の影響構造を明確化すること.	中・高校生の「対子ども社会的自己効力感」の学年進行による発達の変化や男女差を明らかにすること, 「対子ども社会的自己効力感」が「対仲間社会的自己効力感」とどのような関連性を持っているのかを検討すること.	高校での 3 年間を通じた必修の「地域探究型キャリア教育プログラム」で, 生徒の自己効力感があがるのか, 生徒はどのように地域の社会人と関わったのかを確認することで, より効果的な地域の社会人の介入方法について検討すること.
結果	GSES と具体的な行動場面での self-efficacy を測定した自己効力感テストとの間に高い相関関係が認められ, GSES は高い信頼性と妥当性を持つことが明らかにされた.	対人効力感「目的理解の自己効力感」を介してキャリアプランニングの自己効力感に影響していることが示された.	高校生は中学生よりも対子ども社会的自己効力感が高く, 女子は男子よりも高い結果が示された. 男女差については, 学年が上がるにつれ, 縮まる傾向が示された. 対子ども社会的自己効力感と対仲間社会的自己効力感には正の相関があり, 対子ども社会的自己効力感是对仲間における共感・援助の効力感との関連性が高いことが示された.	
項目	①何か仕事をするときは, 自信を持ってやるほうである。 ②過去に犯した失敗や嫌な経験を思いだして, 暗い気持ちになることがよくある。 ③友人より優れた能力がある。 ④仕事を終えた後, 失敗したと感 じることのほうが多い。 ⑤人と比べて心配性なほうである。 ⑥何かを決めるとき, 迷わずに決定するほうである。	①何か仕事をするときは, 自信を持ってやるほうである。 ②過去に犯した失敗や嫌な経験を思いだして, 暗い気持ちになることがよくある。 ③友人より優れた能力がある。 ④仕事を終えた後, 失敗したと感 じることのほうが多い。 ⑤人と比べて心配性なほうである。 ⑥何かを決めるとき, 迷わずに決定するほうである。	① 何か仕事をするときは, 自信をもってやるほうである ② 過去(今まで)に やってしまった失敗や, いやなこと(経験)を思い出して, 暗い気持ちになることが, よくある ③ 友だちよりも, (ぼくは・わたしは)すぐれた能力がある ④ 仕事を終えたあとで, 成功したと感 じることよりも失敗したと感 じることのほうが多い ⑤ 人と比べて, (ぼく・わたし)は心配症	① 何か仕事をするときは, 自信をもってやるほうである ② 過去(今まで)に やってしまった失敗や, いやなこと(経験)を思い出して, 暗い気持ちになることが, よくある ③ 友人よりも, すぐれた能力がある ④ 仕事を終えたあとで, 成功したと感 じることよりも失敗したと感 じることのほうが多い ⑤ 人と比べて, 心配症(何かと心配してしまうような性格)である

⑦何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	⑦何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	(何かと心配してしまうような性格)である	⑥ 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである
⑧ひっこみじあんなほうだと思う。	⑧ひっこみじあんなほうだと思う。	⑥ 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである	⑦ 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い
⑨人より記憶力がよいほうである。	⑨人より記憶力がよいほうである。	⑦ 何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い	⑧ 内気で自己表現が控えめな方だと思う
⑩結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。	⑩結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う。	⑧ ひっこみじあんな方だと思う	⑨ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも、積極的に取り組んでいくほうだと思う
⑪どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。	⑪どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。	⑨ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う	⑩ どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある
⑫友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	⑫友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	⑩ どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある	⑪ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野がある
⑬どんなことでも積極的にこなすほうである。	⑬どんなことでも積極的にこなすほうである。	⑪ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野が、(ぼく・わたしには)ある	⑫ どんなことでも積極的にこなすほうである
⑭小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	⑭小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	⑫ どんなことでも積極的にこなすほうである	⑬ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである
⑮積極的に活動するのは、苦手なほうである。	⑮積極的に活動するのは、苦手なほうである。	⑬ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである	⑭ 世の中に役に立つことができそうな発想やできそうな目標が、できたと思う
⑯世の中に貢献できる力があると思う。	⑯世の中に貢献できる力があると思う。	⑭ 世の中に貢献(役に立つことが)できる力が、(ぼく・わたしには)あると思う	

表10-2: 参考項目と本調査の比較(他者との関わり方に関する項目)

論文	子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)(内閣府政策統括官(共生社会政策担当)調査実施機関:株式会社オノフ2020)	労働政策研究報告書No. 104 学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達—キャリア教育との連携に向けて題5章(労働政策研究・研修機構2008)	本論文
対象	全国の13歳から29歳までの男女 標本数10,000サンプル	東京都多摩地区の中学2年生205名	三重県立飯南高等学校1~3年生 一回目186名 二回目184名
目的	子供・若者を取り巻く現状及び課題を的確に把握すること。政府、地方自治体、民間団体等による子供・若者育成支援施策について、施策の当事者である子供・若者の考えや期待を把握すること。	中学生の職場体験を通じた意識の変化を明らかにすること。職場体験が進路意識にどのような影響を与えるかを把握すること。	高校での地域と連携したキャリア教育を経て「自己効力感」が向上することは、生徒の将来への意識や行動にも影響する。という仮説に基づき、3年間を通した必修の「キャリア教育プログラム」で、生徒の自己効力感がどのようにあがるのか、生徒はどのように地域の社会人と関わったのかを確認することで、より効果的な地域の社会人の介入方法について検討すること。
結果	他者との関わり方について、家族や友人とのコミュニケーション頻度が「毎日」と答えた割合は約70%。相談相手が「いる」と答えた割合は約65%。孤独感を	体験前後の自己効力感の変化に影響を与えた要因では、職場体験の評価が大きな影響を与え、職場体験の評価には、体験先の仕事の面白みを感じたり、よい	

	<p>「よく感じる」と答えた割合は約 20%。 利用したことのある支援機関については、学校カウンセラーが最も多く約 30%。 支援機関に対する満足度は、満足と答えた割合が約 50%。 学校や職場以外で他者を行う活動について、ボランティア活動に参加したことがあると答えた割合は約 25%。コミュニティ活動への参加状況は、参加したことがあると答えた割合が約 20%。 社会参加について、社会貢献意識が「高い」と答えた割合は約 55%。社会活動への参加意欲が「ある」と答えた割合は約 60%であった。</p>	<p>雰囲気の中で仕事ができたりするなど、職場体験における満足感や達成感が自己効力感を上昇させる可能性があると考えられる。また、人生の自己効力感に進路成熟の進路計画が影響していた。 職場体験前の期待の高低、職場体験後の評価の高低を基準に中学生をタイプ分けして自己効力感を比較したところ、期待が高く評価も高い生徒は進路学習を通して上昇し、期待が低く評価も低い生徒は下降していた。期待が低く評価が高い生徒では職場体験直後に上昇していた。しかしながら、一定期間が経過した後には自己効力感が下降していた。</p>	
項目	<p>地域の人とあなたのかかわりはどのようなものですか。（近所の人、町内会などの知人、消防団などの地域活動での知人、塾や習い事での知人、参加している NPO 法人など） 会話やメール等をよくしている 何でも悩みを相談できる人がいる 楽しく話せる時がある 困ったときは助けてくれる 他の人には言えない本音を話せることがある 強いつながりを感じている</p>	<p>職場体験先で人の仕事を見るのが勉強になった 職場体験は自分のためになった 職場体験先で仕事をするのが面白かった 職場体験は面白かった 職場体験先ではどんな人が働いているのか分かった 職場体験先の仕事の中身がよく分かった 職場体験は将来の進路を考えるのに役立つと思う 職場体験先の人と話をするのが面白かった 職場体験先の人の話が勉強になった 職場体験先の仕事にはどんな人が向いているのが分かった 職場体験先の仕事を将来もやってみたいと思った 職場体験先の仕事が必要なのかが分かった 職場体験先の仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった</p>	<p>【他者受容】 困ったときには、助言や助けてくれる人がいる なんでも相談できる人がいる</p> <p>【言語的説得（社会的説得）】 期待されていると感じる人がいる 励ましてくれる人がいる</p> <p>【代理的経験】 憧れの人がいる</p> <p>【情動的喚起（生理的喚起）】 楽しく話せる人がいる</p> <p>上記のような人は特にいなかった</p>

表10-3: 参考項目と本調査の比較(基礎的汎用的能力等に関する項目)

論文	子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）（内閣府政策統括官（共生社会政策担当）調査実施機関：株式会社オノフ 2020）	本論文
対象	全国の 13 歳から 29 歳までの男女 標本数 10,000 サンプル	三重県立飯南高等学校 1～3 年生 一回目 186 名 二回目 184 名
目的	子供・若者を取り巻く現状及び課題を的確に把握すること。 政府、地方自治体、民間団体等による子供・若者育成支援施策について、施策の当事者である子供・若者の考えや期待を把握すること。	高校での地域と連携したキャリア教育を経て「自己効力感」が向上することは、生徒の将来への意識や行動にも影響する。という仮説に基づき、3 年間を通した必修の「キャリア教育プログラム」で、生徒の自己効力感がどのようにあがるのか、生徒はどのように地域の社会人と関わったのかを確認することで、より効果的な地域の社会人の介入方法について検討すること。

結果	<p>人生観・充実度について、自分の人生に「満足している」と答えた割合は約 60%。 将来に「希望がある」と答えた割合は約 59%。 日常生活で「困難を感じる」と答えた割合は約 40%。 将来に対する不安を感じる割合は約 45%。 社会参加について、社会貢献意識が「高い」と答えた割合は約 55%。社会活動への参加意欲が「ある」と答えた割合は約 60%。 将来像については、40 歳になったときの自分のイメージについて、「結婚している」と答えた割合は約 57%。 「幸せになっている」と答えた割合は約 62%。 「親を大切にしている」と答えた割合は約 67%。</p>	
項目	<p>あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか 自分には自分らしさというものがあると思う 自分の欲しいものをがまんすることが苦手だ 今の自分を変えたいと思う 将来よりも今の生活を楽しみたい 努力すれば希望の職業につくことができる 自分の将来は運やチャンスによって決まる 人生で起こることは、結局は自分に原因があると思う 今の自分が好きだ 自分らしさを強調するより、他人と同じことをしていると安心だ 自分の親（保護者）から愛されていると思う うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる いまの自分自身に満足している 自分は役に立たないと強く感じる</p>	<p>受動 ①話しかけられても緊張せず自分の意見を話せるようになった ②社会人など大人の呼びかけに対して怖がらずに応えられるようになった</p> <p>能動 ③人前で自分の意見を話せるようになった ④自分には見どころがあると感じ積極的に行動できるようになった ⑤自分が相談すれば助けてくれる人がいると感じ、社会人など大人に相談出来るようになった 将来について ⑥前向きに将来の事を考える事ができるようになり、将来の為に情報収集や行動ができるようになった</p>

第一回目調査からの課題として、以下の 3 点が明らかとなった。

質問項目でたずねている他者属性が限定的すぎるのではないか。「地域の大人」という記載は解釈の幅が広すぎるため、回答にあたって解釈が統一されないのではないかと。上記を踏まえ、第二回目調査では、以下の通り項目の修正や追加を行った。

- ・ 関わった他者に関する質問項目の記載を友人ではなく、クラスメイトとする。
- ・ 他者との関わり方に関する質問項目の記載を、多くかかわったではなく、印象に残ったかという表記にする。
- ・ 項目で示す、関わった人物についての選択肢が限定的すぎたため、選択肢をさらに増やし、恣意的な結果とならないよう配慮を行う。また、地域の人という記載には解釈の再現性がうすくなる危険性があるため、「地域の社会人」などと限定的に確認する。
- ・ カリキュラムの感想や満足度、自身の関わり方への自己評価を確認する。

また、記述量や自己効力感得点の学年差、生徒の主体的に取り組む姿勢(マインド)による結果の違いについても注目し、分析を行った。

第5節 調査結果

飯南高校での地域課題解決型キャリア教育では、自己効力感が向上したか？

自己効力感の得点範囲は0から14点で、表11に示す通り、全体では「入学時(1年生は入学前も可とする)の得点」は平均5.87点で標準偏差は3.58。最少回答は0、最大回答は14で、最頻値は4であった。「現在の得点」は、平均6.05点と入学時の平均と比べ上昇している。

学年ごとでは、各学年を通し入学時と現在を比較すると、平均も標準偏差もわずかに上昇しているが、それぞれの特徴として、1年生は最頻値が4点から3点(-1)に下がっている。2年生は平均が5.27から5.71(+0.44)と一番上昇しており、最大値13点から14点(+1)、最頻値6点から7点(+1)に上昇している。3年生は標準偏差が3.36から3.05(-0.31)となっている。

第二回目調査では、全体の「入学時(1年生は入学前も可とする)の得点」は平均5.41点で標準偏差は3.59。最少回答は0、最大回答は14で、最頻値は4であった。「現在の得点」は、平均5.91点とした。

学年ごとでは、各学年を通し入学時と現在を比較すると、平均はわずかに上昇している。

それぞれの特徴としては、1年生は、他の学年と比較し、最も自己効力感得点の平均が上昇、最頻値についても3点から7点(+4)と変化した。

2年生は、各学年の中で入学時の最頻値が最も低い0点であり、唯一最大値が14点から13点(-1)と減少した。3年生は、標準偏差が3.22から3.46(+0.24)と大きくなっている。

学年を重ねるごとに自己効力感が上昇するという仮説は、証明されなかったが、全学年わずかながらではあるが、上昇をしていることが明らかとなった。

図12から図19では、第一回調査と第二回目調査での、全校生徒の得点毎割合や入学時と現在の得点推移について変化点数毎の割合、平均点と標準偏差についてグラフで示す。

表 1 1 : 自己効力感の数値, 平均

	第一回目調査								第二回目調査							
	全学年		1 年		2 年		3 年		全学年		1 年		2 年		3 年	
	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在	入学時	現在
平均	5.87	6.05	5.89	5.95	5.27	5.71	6.44	6.46	5.41	5.91	5.65	6.25	5.29	5.78	5.26	5.76
標準偏差	3.58	3.6	3.74	4.01	3.56	3.71	3.36	3.05	3.59	3.64	3.76	3.75	3.8	3.69	3.22	3.46
最少	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
最大	14	14	14	14	13	14	14	14	14	14	14	14	14	13	14	14
最頻値	4	4	4	3	6	7	7	7	4	7	3	7	0	2	4	6

第一回目

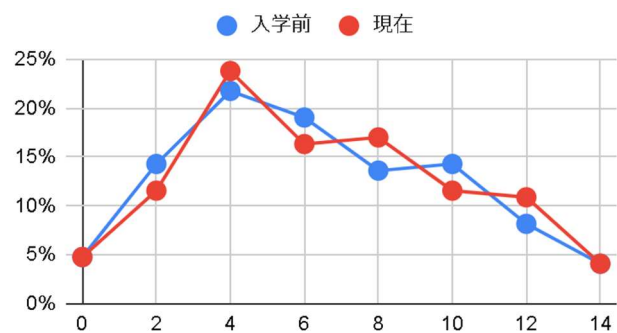


図 1 2 : 入学時, 現在の得点 (全学年)

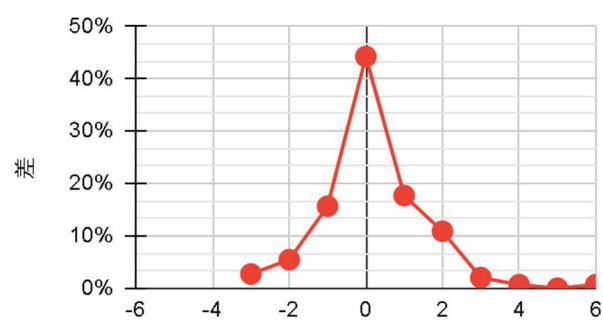


図 1 3 : 得点の推移 (全学年)

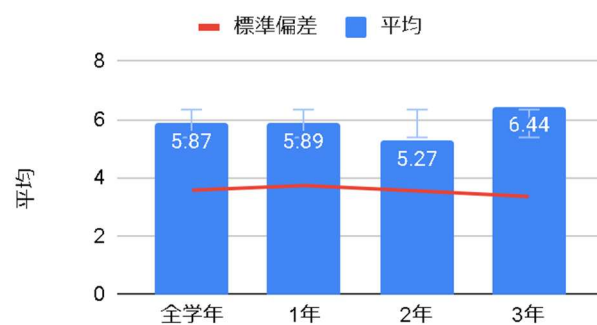


図 1 4 : 第一回目調査 (入学時)

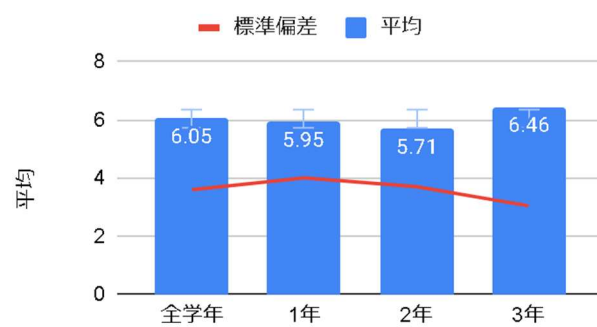


図 1 5 : 第一回目調査 (現在)

第二回目

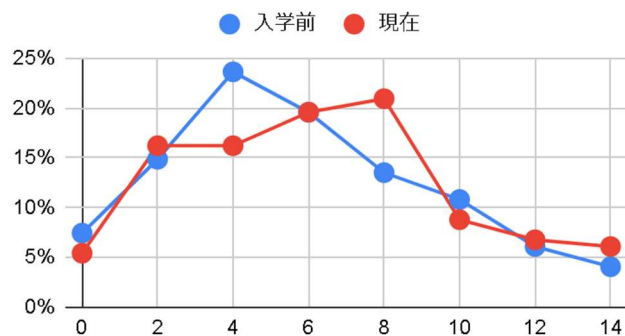


図 1 6 : 入学時, 現在の得点 (全学年)

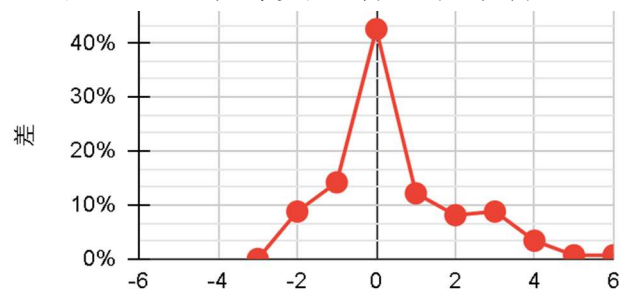


図 1 7 : 得点の推移 (全学年)

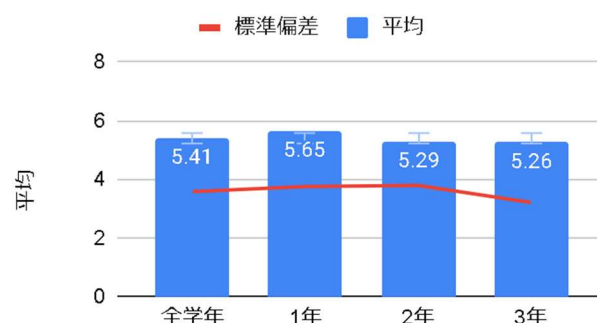


図 1 8 : 第二回目調査 (入学時)

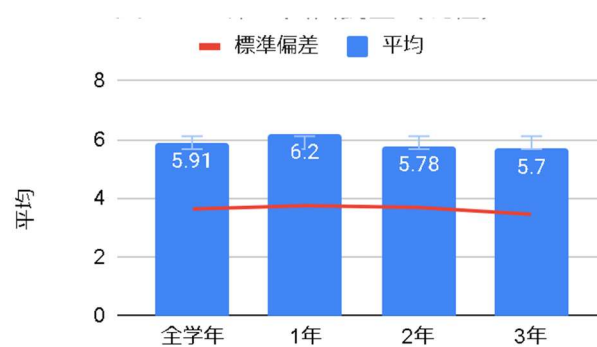


図 1 9 : 第二回目調査 (現在)

第一回目調査では「産業社会と人間」(1年次),「キャリアデザイン」(2年次),「いいなんゼミ」(3年次)の中で,特にどのような人と関わりを持ったか(3 つまで選択可)については,表20で示す通り,全体では「友人」の回答が 34.24%,次に先生 32.12%,地域の方 21.52%であった。それぞれの特徴としては,1 年生は,どれにも当てはまる人がいないという回答は唯一 0 であった。2 年生は,友人が 72.55%,先生が 70.59%と僅差であった。3 年生は唯一,先生が 82.69%と一番多く,友人が 78.85%であった。

また,表20のデータは,回答は 3 つまで選択可としていたが,3 つ以上の選択もあったものについても含めて回答割合を確認した。

「産業社会と人間」(1年次),「キャリアデザイン」(2年次),「いいなんゼミ」(3年次)の中で出会った地域の方(家族や先生,バイトやボランティア先以外の大人)の中で,特にどのような人と関わりを持ったかについては,全学年では,上記のような人は特にいなかったが 52.98%と一番多く,次に励ましてくれる人がいるが 17.22%であった。

その他(無回答含む) 1.99%について最も少なかったのは,期待されていると感じる人がいるが 4.64%であった。

どの学年も,上記のような人は特にいなかったが最も多く,期待されていると感じる人がいるがその他(無回答含む)につづき少ないが,1 年は上記のような人は特にいなかった 54.55%について,励ましてくれる人がいる,自分の悩みや相談に対し、助けてくれる人がいるがともに 20.45%であった。

2 年生は期待されていると感じる人がいるが 1.96%,励ましてくれる人がいるが 9.8%。

3 年生は期待されていると感じる人がいる 7.69%,励ましてくれる人がいる 23.08%と他の学年よりやや高いが,自分の悩みや相談に対し、助けてくれる人がいる 9.62%と低い。

また,上記エピソードについての自由記述(特になしなどの回答は省略)があったのは,1 年生 1 件,2 年生 10 件,3 年生 2 件であった。

これは、表7で示された通り、地域の社会人との接点の多さ等、単純接触回数が多い他者に回答が偏っているため、妥当といえる結果である。

2年生に自由記述エピソードが特に多くみられた点については、学校へのインタビューから2年生でのインターンシップ、地域にでていく機会の多さが要因であることが確認できた。

第二回目調査(表21)では、「産業社会と人間」(1年次)、「キャリアデザイン」(2年次)、「いいなんゼミ」(3年次)の中で、どのような人と関わりが特に印象に残っているか？(3つまで選択可)については、全体では飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)78.38%、飯南高校の先生の回答が45.27%、次いで地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)29.05%であった。

それぞれの特徴としては、1年生は、飯南高校の先輩、後輩(OB.OGを含む)という回答が地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)について、20.37%であった。

2年生は、行政の方が唯一0であった。3年生は、その他のサポートしてくれる人材という回答が7.55%で、他の学年と比較するとやや多くみられた。

「産業社会と人間」(1年次)、「キャリアデザイン」(2年次)、「いいなんゼミ」(3年次)の中で出会った地域の社会人(松阪市内～飯南地域の経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)について、全学年では、第一回調査とは異なり、困ったときには、助言や助けてくれる人がいるが36.49%と一番多く、ついで楽しく話せる人がいるが28.38%、上記のような人は特にいなかったが27.7%であった。憧れの人がいるがその他(無回答含む)1.35%について最も少なく6.08%で、学年ごとの特徴としては、1年生楽しく話せる人がいる37.04%が最も多く、上記のような人は特にいなかった31.48%、困ったときには、助言や助けてくれる人がいる29.63%で、期待されていると感じる人がいるが最も少ない7.41%であった。

2年生は、全体の傾向とほぼ差がなく、3年生は、困ったときには、助言や助けてくれる人がいる43.4%で最も多く、ついで、なんでも相談できる人がいる、上記のような人は特にいなかったがそ

れぞれ 24.53%,憧れの人がいるについては,その他の項目の中でも他の学年と比較しても最も少ない 3.77%であった.

以上から,生徒は飯南高校の同級生(クラスメイトや友人),飯南高校に次いで,地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)との関わりを印象的に感じていることがわかった.このことから,地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)との関わりは生徒にとってなんらか印象に残る機会となっていたことがわかった.

地域の社会人(松阪市内～飯南地域の経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)との関わり方については,一回目調査では,励ましてくれる人があるという回答の割合が高く,助けてくれる人があるという回答の割合も学年により多くみられた.憧れの人があるという回答の割合,期待されていると感じる人の回答割合は全体的に低かった.

二回目調査も一回目調査と同様に,飯南高校の同級生(クラスメイトや友人),飯南高校に次いで,地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)との関わりを印象的に感じていることがわかった.

1年では地域の社会人(松阪市内～飯南地域の経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)の次に飯南高校の先輩、後輩(OB.OGを含む)との関わりが印象的であったことから,学年をこえ先輩や OB.OG を言語的(社会的)説得や,代理的経験のモデルとしての可能性も示唆された.

地域の社会人(松阪市内～飯南地域の経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)との関わり方については,困ったときには,助言や助けてくれる人があるの回答割合が高く,他者からの受容を感じ取っていると考えられる結果が得られた.また,楽しく話せる人がある,期待されていると感じる人があるの回答割合も高く,情動的喚起(生理的喚起)と言語的(社会的)説得の要素を生徒が実感していることがわかった.しかし,励ましてくれる人がある,憧れの人があるの回答割合は他の項目と比べ低い結果となり,言語的(社会的)説得,代理的経験の要素はやや実感が薄いことがわかった.

ただし、一回目調査と二回目調査では質問項目の中で対象とした「地域の社会人」の範囲が異なっていることについて留意が必要である。

表 20：他者との関わり（第一回目調査）

		全体 N=147	1年 N=44	2年 N=51	3年 N=52
「産業社会と人間」（1年次）、 「キャリアデザイン」（2年次）、 「いいなんゼミ」（3年次）の中 で、特にどのような人と関わりを持 ったか3つまで選択してください。 （複数回答可）（%）	先生	32.12	61.36	70.59	82.69
	友人	34.24	79.55	72.55	78.85
	家族	6.67	6.82	13.73	23.08
	地域の方	21.52	54.55	60.78	30.77
	地域以外のサポート してくれる人材	4.24	4.55	13.73	9.62
	どれにも当てはまる 人がいない	1.21	61.36	3.92	3.85
	その他 （無回答含む）	0	0	0	0
「産業社会と人間」（1年次）、 「キャリアデザイン」（2年次）、 「いいなんゼミ」（3年次）の中で 出会った地域の方（家族や先生、バ イトやボランティア先以外の大人） の中で（%）	憧れの人がいる	8.61	6.82	7.84	11.54
	なんでも相談できる 人はいる	16.56	18.18	13.73	19.23
	期待されていると感 じる人がいる	4.64	4.55	1.96	7.69
	励ましてくれる人が いる	17.22	20.45	9.8	23.08
	自分の悩みや相談に 対し、助けてくれる 人がいる	16.56	20.45	21.57	9.62
	上記のような人は特 にいなかった	52.98	54.55	58.82	50
	その他 （無回答含む）	1.99	0	3.92	1.92

表 2 1 : 他者との関わり (第二回目調査)

		全体 N=148	1 年 N=54	2 年 N=41	3 年 N=53
「産業社会と人間」(1 年次)、 「キャリアデザイン」(2 年次)、 「いいなんゼミ」(3 年次) の中 で、どのような人と関わりが特に印 象に残っていますか? 3 つまで選択 してください。 ※1 つでも OK(%)	飯南高校の同級生(クラス メイトや友人)	78.38	70.37	82.93	83.02
	飯南高校の先輩、後輩 (OB. OG を含む)	18.24	20.37	14.63	18.87
	飯南高校の先生	45.27	38.89	46.34	50.94
	大学や専門学校の教員	17.57	11.11	21.95	20.75
	大学や専門学校の教員	17.57	11.11	21.95	20.75
	地域の社会人(経営者を含 む個人事業主・企業・団体 の方)	29.05	27.78	36.59	24.53
	上記以外の地域住民の方	6.76	9.26	7.32	3.77
	行政の方	2.7	3.7	0	3.77
	その他のサポートしてくれ る人材	4.05	1.85	2.44	7.55
	どれにも当てはまる人がい ない	4.05	7.41	2.44	2.44
	その他 (無回答含む)	0	0	0	0
	困ったときには、助言や助 けてくれる人がいる	36.49	29.63	36.59	43.4
	なんでも相談できる人がい る	20.27	18.52	17.07	24.53
	期待されていると感じる人 がいる	12.16	7.41	14.63	15.09
	励ましてくれる人がいる	10.14	11.11	7.32	11.32
「産業社会と人間」(1 年次)、 「キャリアデザイン」(2 年次)、 「いいなんゼミ」(3 年次) の中で 出会った地域の社会人(松阪市内～ 飯南地域の経営者を含む個人事業 主・企業・団体の方)で(%)	憧れの人がいる	6.08	7.41	7.32	3.77
	楽しく話せる人がいる	28.38	37.04	26.83	20.75
	上記のような人は特にいな かった	27.7	31.48	26.83	24.53
	その他 (無回答含む)	1.35	1.85	0	1.89

どのような行動変容や成長を生徒が実感しているか?

表22では,3 年間での活動について,自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面の回答割合を示した.

全学年では,発表の場面が 25.2%と特に多く,次に,地域でのフィールドワークの場面 20.33%と多く回答が見られた.その他が 2.44%,その他自分のテーマに関連した取組への参加が 4.47%と最も低かった.1 年生は,地域でのフィールドワークの場が 40.91%,ついで,発表の場面

が 36.36%,特になかったが 34.09%.2 年生には,その他として「勉学」をあげる生徒が 1 名見られ,全体の回答と同じく発表が 50.98%と最も多く,ついで,地域でのフィールドワークの場面 45.1%の順で高かった.

また,3 年生は発表の場面が 38.46%と最も多く,ついで,先生に相談する場面・まとめ作業の場面・特になかったがそれぞれ 26.92%,地域でのフィールドワークの場面・その他が 17.31%という特徴がみられた.

回答については,3 つまで選択可としていたが,3 つ以上の選択もあったものについても含め回答割合を確認した.

発表の場面は,取り組みの集大成でもあるため,特に成長実感が高かったのではないかと考えられる.また,地域でのフィールドワークの場面という回答が多かったことは,学校が意図していた「地域の大人との出会いによる生徒の成長」の効果を生徒が感じられていたといえる.

3 年生が地域でのフィールドワークの場面という回答が少なかったのは,地域に出向く機会がカリキュラム上少なかったことも影響するのではないかと.先生に相談する場面・まとめ作業の場面も同様に,その時間を多く過ごしたことが影響すると考えられる.

第二回目調査では,全学年で,発表の場面が 46.62%と特に多く,地域でのフィールドワークの場面 43.24%がついで多く回答が見られた.まとめ作業の場面,その他自分のテーマに関連した取組への参加が 9.46 と最も低かった.

1 年生では,地域でのフィールドワークの場面 50%の回答が最も多く,2 年生には,地域の人に助言を受ける場面(地域の社会人に相談助言を受ける場面)34.15%の割合が他の学年と比べ多いという特徴があった.

第二回目調査では,第一回目調査と同様に,発表の場面,地域でのフィールドワークの場面の回答割合が多くみられた.第二回目調査の実施時期は,学期末の最終のプレゼンテーション機会を終えたタイミングの実施でもあることから,1年間のまとめとして振り返る中で,地域の人に助言を受ける場面(地域の社会人に相談助言を受ける場面)での成長や,自身の中での重要性を

再認識したのではないかと考えられる。また、進路ガイダンス、本気の大人講演、インターンシップなど、より将来を考える機会の中で職業人との出会いが多かったことも要因であると考えられる。

表22:行動変容や成長実感

		第一回目調査				第二回目調査			
		全体 N=147	1年 N=44	2年 N=51	3年 N=52	全体 N=148	1年 N=54	2年 N=41	3年 N=53
3年間の活動について、自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面について3つまで選択してください。 ※1つでもOK(%)	地域でのフィールドワークの場面	20.33	40.91	45.1	17.31	43.24	50	39.02	39.62
	先生に相談する場面 (二回目調査では、相談助言を受ける場面に変更)	14.23	13.64	29.41	26.92	18.92	14.81	24.39	20.75
	まとめ作業の場面	13.41	22.73	17.65	26.92	9.46	3.7	9.76	15.09
	地域の人に助言を受ける場面 (地域の社会人に相談助言を受ける場面)	6.1	11.36	9.8	9.62	20.27	12.96	34.15	16.98
	発表の場面	25.2	36.36	50.98	38.46	46.62	38.89	53.66	47.17
	その他自分のテーマに関連した取組への参加	4.47	4.55	5.88	11.54	9.46	7.41	17.07	5.66
	特になかった	15.85	34.09	19.61	26.92	19.59	24.07	12.2	20.75
	その他 (無回答含む)	2.44	9.09	1.96	0	1.35	7.41	4.88	3.77

第二回目調査では「主体性な関わりと満足度」について、他者との関わりや関係性以外にも、プログラムの目的理解や満足度を確認し(表23)、生徒の主体的な関わり方の影響を確認するため、3年間の活動について

- ・自分なりに取り組む意味を理解して取り組むことができましたか？
- ・カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対して満足ができましたか？

という項目を追加した。全学年の平均は3-4点であった。

後のクロス集計にて、自己効力感の得点、具体的な記述内容と照らし合わせその特徴を確認する。

表23:主体性な関わりと満足度

	全体 N=148	1年 N=54	2年 N=41	3年 N=53
3年間の活動について、自分なりに取り組む意味を理解して取り組む事ができましたか？（平均）	3.77	3.58	4	3.77
3年間の活動について、カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対して満足ができましたか？（平均）	3.72	3.48	3.87	3.85

自己効力感の高い,低いの確認方法としては木村ら(2019)による標準化得点換算表を用い段階評価値表でセルフ・エフィカシーの強さを評価できるが,今回は全体の入学時の自己効力感得点を,全学年平均の5以下・以上の2群にわけ,更にそれぞれの群の中で入学時の自己効力感得点から,現在の自己効力感得点が向上している群,減少している群,変化のない群に分けた.

今回は,自信のない生徒がこのプログラムの中でどのような人と,どのように関わる事が自己効力感を上昇させることに有効だと考えられるかを確認するため,入学時の平均以下で現在の自己効力感得点が入学時より向上している生徒を中心に,クロス集計により自己効力感と,他者,特に地域の方との関わりとの関係性を確認する.

有効回答数全体に占めるそれぞれの群の割合,それぞれの群ごとの学年割合については以下表24,25の通りである.

表 2 4 : クロス集計 (第一回目調査)

	平均点以下 × 上昇	平均点以下 × 減少	平均点以下 × 変化なし	平均点以上 × 上昇	平均点以上 × 減少	平均点以上 × 変化なし
全体割合 (%)	16.33	8.84	25.17	15.65	14.97	19.05
群の 1 年生割合 (%)	16.67	38.46	16.22	26.09	9.09	14.29
群の 2 年生割合 (%)	37.5	46.15	8.11	21.74	13.64	14.29
群の 3 年生割合 (%)	41.67	15.38	10.81	8.7	36.36	17.86

表 2 5 : クロス集計 (第二回目調査)

	平均点以下 × 上昇	平均点以下 × 減少	平均点以下 × 変化なし	平均点以上 × 上昇	高平均点以上 × 減少	平均点以上 × 変化なし
全体割合 (%)	24.32	12.16	18.92	10.14	10.81	23.65
群の 1 年生割合 (%)	36.11	22.22	39.29	26.67	50	40
群の 2 年生割合 (%)	27.78	22.22	35.71	33.33	25	22.86
群の 3 年生割合 (%)	36.11	55.56	25	40	25	37.14

一回目調査において、特にどのような人と関わりを持ったか(表26)について、平均点以下×上昇(平均)では、友人 87.5%、先生 79.17%について、地域の方 46.83%が多く、どれにも当てはまる人がいないが 0%であった。平均点以下、平均点以上ともに上昇した群では先生と回答した割合が減少したグループと比較して高く、どれにも当てはまる人がいないという回答割合が低かった。

出会った地域の方(家族や先生、バイトやボランティア先以外の大人)との関係性について、平均点以下×上昇(平均)では、上記のような人は特にいなかったが最も多い 66.67%で、自分の悩みや相談に対し、助けてくれる人がいる 16.67%、励ましてくれる人がいる 12.5%、憧れの人
がいる、期待されていると感じる人がいる、なんでも相談できる 4.17%であった。

上昇した群では、上記のような人は特にいなかったと回答した割合が、減少した群と比較してやや高く、なんでも相談できる人はいるという回答割合が低かった。

憧れの人がいるについては、平均点以下×上昇(平均)のみ 0%という結果であった。しかし、平均点以上×減少(平均)の群では、18.18%と他の群と比べて高い。期待されていると感じる人
がいるについても、同様の結果であった。

平均点以下×上昇(平均)の群では、自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面(表28)として、その他自分のテーマに関連した取組への参加が 69.44%と最も多く、まとめ作業の場面 45.83%、特になかった 34.72%、発表の場面 20.83%、地域でのフィールドワークの場面 16.67%という結果であった。地域の人に助言を受ける場面 4.17%、先生に相談する場面 8.33%はその他の場面と比べ低い結果となった。

発表の場面についてはどの群も、大きな差はなかったが、地域でのフィールドワークの場面は、他の群と比較し平均点以下×減少(平均)の群で多く回答され、地域の人に助言を受ける場面は最も低く回答され、平均点以上×減少(平均)では 22.73%と最も高かった。

先生に相談する場面については、平均点以上×上昇・減少(平均)での回答割合が多かった。

自身の変化については、平均点以上の群が平均点以下の群と比較して総合的に高く、平均点以下×減少(平均)の群は特に、③人前で自分の意見を話せるようになった⑥前向きに将来の事を考えることができるようになり、将来の為に情報収集や行動ができるようになった。の得点が低く、能動的な行動の自己評価はやや低めの結果であった。

表27では、第二回目調査の「産業社会と人間」(1年次)「キャリアデザイン」(2年次)「いいなんゼミ」(3年次)の中でどのような人と関わりが特に印象に残っていますか？(3つまで選択可。1つでも可)の回答割合を示した。平均点以下×上昇(平均)では、地域の社会人(経営者を含む個人事業主・企業・団体の方)は 30.56%であり、平均点以下×減少(平均)では 11.11%、平均点以上×上昇(平均)26.67%、平均点以上×減少(平均)18.75%で、上昇した群では減少した群と比べ、地域の社会人との関わりが印象的であったことがわかった。

平均点以下×上昇(平均)の群で最も回答割合が多いのは飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)69.44%飯南高校の先生 44.44%で、平均点以下×減少(平均)では、飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)50%、飯南高校の先生 27.78%。平均点以上×上昇(平均)飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)73.33%、飯南高校の先生 33.33%。平均点以下×減少(平均)飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)62.5%、飯南高校の先生 43.75%と同様の結果であった。

出会った地域の方(家族や先生、バイトやボランティア先以外の大人)との関係性については、平均点以下×上昇(平均)では、表10で示している自己効力感の情報源として効果が期待できる項目、期待されていると感じる人がいる 11.11%、励ましてくれる人がいる 8.33%、憧れの人がいる 5.56%、楽しく話せる人がいる 22.22%であった。

最も回答割合が多いのは、困ったときには、助言や助けてくれる人がいる 33.33%で、最も回答割合が少ないのは、上記のような人は特にいなかった 0%と、その他、無回答 0%であった。

平均点以下×減少(平均)では、期待されていると感じる人がいる 5.56%、励ましてくれる人がいる 2.78%、楽しく話せる人がいる 13.89%と平均点以下×上昇(平均)と比較すると少なく、憧れの人がいるに関しては 0%であった。

平均点以上×上昇(平均)では、期待されていると感じる人がいる 26.67%、励ましてくれる人がいる 26.67%、憧れの人がいる 13.33%、楽しく話せる人がいる 33.33%と平均点以下×上昇(平均)に近い結果であった。

どの群も、困ったときには、助言や助けてくれる人がいる、楽しく話せる人がいるとの回答割合が多く、話すことで助けてもらえたり、楽しさを感じられるといった関係性を築いていると言える。また、平均点以下×減少(平均)のみ憧れの人がいるとの回答割合が 0 であることから、自分自身にとって参考となるような地域の社会人との出会いを見いだせなかったのではないかと考えられる。

第二回目調査では、生徒の主体的な姿勢、満足度「出会った地域の方(家族や先生、バイトやボランティア先以外の大人)」の関係性が、対人効力感と、「前向きに将来のことを考えることができるようになり、将来の為に情報集や行動ができるようになった」などの得点と紐づく可能性について確認した。

自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面(表29)では、平均点以下×上昇(平均)の地域でのフィールドワークの場面への回答割合は50%、地域の社会人に相談助言を受ける場面22.22%で、最も回答割合が多いのは、発表の場面55.56%であった。

平均点以下×減少(平均)では、地域の社会人に相談助言を受ける場面27.78%で、最も回答割合が多いのは同様に、発表の場面で38.89%であった。

平均点以上×減少(平均)の回答は、地域でのフィールドワークの場面50.18%で、最も回答割合が多く、地域の社会人に相談助言を受ける場面18.75%、発表の場面は31.25%であった。

発表の場面、地域でのフィールドワークの場面を自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面として多く挙げられていることから、遂行行動の達成(達成経験)や言語的説得(社会的説得)が影響していると考えられる。しかし、平均点以上×減少(平均)の結果の様に、例えば発表がうまくいかなかったという遂行行動の達成(達成経験)がある場合は、必ずしも自己効力感の上昇には繋がらないことも考えられる。

表26:効力感得点と出会った人の属性と関係性(第一回目調査)

		入学時 の効力 感得点	現在の 効力感 得点	差	特にどのような人と関わり が印象的だったか (%)	出会った地域の方（家族や先生、パイ トやボランティア先以外の大人）の中 で (%)		
平均 点 以下	上 昇 （ 平 均 ）	3.04	4.96	1.92	先生	79.17	憧れの人がいる	4.17
					友人	87.5	なんでも相談できる人はい	4.17
					家族	16.67	る	
					地域の方	45.83	期待されていると感じる人	4.17
					地域以外のサポ	8.33	がいる	
					ートしてくれる		励ましてくれる人がいる	12.5
					人材		自分の悩みや相談に対し、	16.67
					どれにも当ては	0	助けてくれる人がいる	
					まる人がいない			
					その他、無回答	0	上記のような人は特にいな	66.67
					かった			
					その他、無回答	4.17		
	減 少 （ 平 均 ）	3.38	2.15	-1.23	先生	53.85	憧れの人がいる	0
					友人	76.92	なんでも相談できる人はい	30.77
					家族	23.08	る	
					地域の方	46.15	期待されていると感じる人	0
					地域以外のサポ	0	がいる	
					ートしてくれる		励ましてくれる人がいる	15.38
					人材		自分の悩みや相談に対し、	23.08
					どれにも当ては	7.69	助けてくれる人がいる	
					まる人がいない		上記のような人は特にいな	46.15
					その他、無回答	0	かった	
					その他、無回答	7.69		
平均 点 以上	上 昇 （ 平 均 ）	10.31	11.62	1.31	先生	82.61	憧れの人がいる	4.35
					友人	78.26	なんでも相談できる人はい	21.74
					家族	17.39	る	
					地域の方	52.17	期待されていると感じる人	8.7
					地域以外のサポ	13.04	がいる	
					ートしてくれる		励ましてくれる人がいる	17.39
					人材		自分の悩みや相談に対し、	26.09
					どれにも当ては	4.35	助けてくれる人がいる	
					まる人がいない		上記のような人は特にいな	43.48
					その他、無回答	0	かった	
					その他、無回答	4.35		
	減 少 （ 平 均 ）	10.54	9.15	-1.38	先生	72.73	憧れの人がいる	18.18
					友人	77.27	なんでも相談できる人はい	22.73
					家族	22.73	る	
					地域の方	36.36	期待されていると感じる人	13.64
					地域以外のサポ	18.18	がいる	
					ートしてくれる		励ましてくれる人がいる	22.73
					人材		自分の悩みや相談に対し、	13.64
					どれにも当ては	9.09	助けてくれる人がいる	
					まる人がいない		上記のような人は特にいな	50
					その他、無回答	0	かった	
					その他、無回答	0		

表 27：効力感得点と出会った人の属性と関係性（第二回目調査）

		入学時の効力感得点	現在の効力感得点	差	特にどのような人と関わりを持ったか		出会った地域の方（家族や先生、パイ トやボランティア先以外の大人）の中 で	
平均点 以下	上昇 （ 平均 ）	2.75	5.42	2.67	飯南高校の同級生	69.44	困ったときには、助言や助 けてくれる人がいる	33.33
					（クラスメイトや 友人）		なんでも相談できる人がい る	11.11
					飯南高校の先輩、 後輩（OB、OG を含 む）	19.44	期待されていると感じる人 がいる	11.11
					飯南高校の先生	44.44	励ましてくれる人がいる	8.33
					大学や専門学校の 教員	27.78	憧れの人がいる	5.56
					地域の社会人（経 営者を含む個人事 業主・企業・団体 の方）	30.56	楽しく話せる人がいる	22.22
							上記のような人は特にいな かった	0
							その他、無回答	0
					上記以外の地域住 民の方	5.56		
					行政の方	5.56		
					その他のサポート してくれる人材	0		
					どれにも当てはま る人がいない	2.78		
					その他、無回答	0		
減少 （ 平均 ）		3.22	1.83	-1.39	飯南高校の同級生	50	困ったときには、助言や助 けてくれる人がいる	16.67
					（クラスメイトや友 人）		なんでも相談できる人がい る	8.33
					飯南高校の先輩、 後輩（OB、OG を含 む）	8.33	期待されていると感じる人 がいる	5.56
					飯南高校の先生	27.78	励ましてくれる人がいる	2.78
					大学や専門学校の 教員	11.11	憧れの人がいる	0
					地域の社会人（経 営者を含む個人事 業主・企業・団体 の方）	11.11	楽しく話せる人がいる	13.89
							上記のような人は特にいな かった	13.89
							その他、無回答	0
					上記以外の地域住 民の方	2.78		
					行政の方	0		
					その他のサポート してくれる人材	0		
					どれにも当てはま る人がいない	0		
					その他、無回答	0		
平均点 以上	上昇 （ 平均 ）	9.07	10.67	1.6	飯南高校の同級生	73.33	困ったときには、助言や助 けてくれる人がいる	33.33
					（クラスメイトや友 人）		なんでも相談できる人がい る	26.67
					飯南高校の先輩、 後輩（OB、OG を含 む）	20	期待されていると感じる人 がいる	26.67
					飯南高校の先生	33.33	励ましてくれる人がいる	26.67
					大学や専門学校の 教員	13.33	憧れの人がいる	13.33
					地域の社会人（経 営者を含む個人事 業主・企業・団体 の方）	26.67	楽しく話せる人がいる	33.33
							上記のような人は特にいな かった	26.67
							その他、無回答	0
					上記以外の地域住 民の方	13.33		
					行政の方	6.67		

				その他のサポート してくれる人材 どれにも当てはま る人がいない	0 6.67		
				その他、無回答	0		
減 少 （ 平 均 ）	8.69	7.31	-1.38	飯南高校の同級生 (クラスメイトや友 人)	62.5	困ったときには、助言や助 けてくれる人がいる	37.5
				飯南高校の先輩、 後輩（OB、OG を含 む）	18.75	なんでも相談できる人がい る	50
				飯南高校の先生	43.75	期待されていると感じる人 がいる	18.75
				大学や専門学校の 教員	12.5	励ましてくれる人がいる	12.5
				地域の社会人（経 営者を含む個人事 業主・企業・団体 の方）	18.75	憧れの人がいる	12.5
				上記以外の地域住 民の方	0	楽しく話せる人がいる	31.25
				行政の方	6.25	上記のような人は特にいな かった	12.5
				その他のサポート してくれる人材 どれにも当てはま る人がいない	0 12.5	その他、無回答	0
				その他、無回答	0		

表 28：効力感得点と生徒の成長、変容実感（第一回目調査）

		入学時の 効力感得 点（平 均）	現在の効 力感得点 （平均）	差	自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面（％）								自身の変容について（平均）					
					地域で のフィ ールド ワーク の場面	先生に 相談す る場面	まとめ 作業の 場面	地域の 人に助 言を受 ける場 面	発表の 場面	その他 自分の テーマ に関連 した取 組への 参加	特にな かった	その 他、無 回答	①話し かけら れても 緊張せ ず自分 の意見 を話せ るよう になっ た	②大人 の呼び かけに 対して 怖がら ずに応 答でき るよう になっ た	③人前 で自分 の意見 を話せ るよう になっ た	④自分 には見 どころ がある と感 じ、怖 がらず に地域 や外部 の大人 がいる イベン トへ参 加でき るよう になっ た	⑤自分 が求め れば手 を伸ば してく れる人 がいる と感 じ、大 人に相 談出来 るよう になっ た	⑥前向 きに将 来の事 を考え る事が できる ように なり、 将来の 為に情 報集や 行動が できる ように なった
平均点 以下	上昇	3.04	4.96	1.92	16.67	8.33	45.83	4.17	20.83	69.44	34.72	0	2.88	3.21	3.42	2.17	3.13	3.38
	減少	3.38	2.15	-1.23	46.15	7.69	23.08	0	38.46	0	38.46	7.69	2.62	2.92	2.38	2.31	2.62	2.62
平均点 以上	上昇	10.31	11.62	1.31	26.09	17.39	30.43	4.35	56.52	8.7	26.09	0	3.96	4.26	4.09	3.43	3.61	3.52
	減少	10.54	9.15	-1.38	22.73	31.82	18.18	22.73	40.91	13.64	31.82	0	4.05	4.23	4.09	3.23	3.77	3.91

表 2 9 : 効力感得点と生徒の成長, 変容実感 (第二回目調査)

		入学時の 効力感得 点 (平 均)	現在の効 力感得点 (平均)	差	自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面 (%)							自身の変容について (平均)						
					地域で のフィ ールド ワーク の場面	先生に 相談助 言を受 ける場 面	まとめ 作業の 場面	地域の 社会人 に相談 助言を 受ける 場面	発表の 場面	その他 自分の テーマ に関連 した取 組への 参加	特にな かった	その 他、無 回答	①話し かけら れても 緊張せ ず自分 の意見 を話せ るよう になっ た	②大人 の呼び かけに 対して 怖がら ずに応 答でき るよう になっ た	③人前 で自分 の意見 を話せ るよう になっ た	④自分 には見 どころ がある と感 じ、怖 がらず に地域 や外部 の大人 がいる イベン トへ参 加でき るよう になっ た	⑤自分 が求め れば手 を伸ば してく れる人 がいる と感 じ、大 人に相 談出来 るよう になっ た	⑥前向 きに将 来の事 を考え る事が できる ように なり、 将来の 為に情 報集や 行動が できる ように なった
平均点 以下	上昇	2.75	5.42	2.67	50	13.89	5.56	22.22	55.56	11.11	0	2.78	3.53	3.67	3.61	2.78	3	3.25
	減少	3.22	1.83	-1.39	38.89	22.22	16.67	27.78	38.89	5.56	27.78	0	3.39	3.33	3.28	2.72	3.06	3
平均点 以上	上昇	9.07	10.67	1.6	33.33	33.33	20	33.33	60	0	13.33	6.67	4.2	4.27	4.27	4	4	4.07
	減少	8.69	7.31	-1.38	50.18	18.75	6.25	18.75	31.25	6.25	18.75	0	3.63	3.75	3.69	3.5	3.69	3.63

表30自身の変化について、平均点以下×上昇(平均)では、受動的な対人行動①3.53,②3.67,能動的な対人行動③3.61,④2.78,⑤3と受動的な対人行動がやや高い傾向が見られた。また、キャリア展望に関する⑥は、3.25であった。

平均点以下×減少(平均)では、平均点以下×上昇(平均)と同様の結果であるが、比べると全体的にやや低い得点で、平均点以上×上昇(平均)も、受動的な対人行動①4.2,②4.27,能動的な対人行動③4.27,④4,⑤4と受動的な対人行動がやや高い傾向が見られ、キャリア展望に関する⑥は4.07で、平均点以下×上昇(平均)と比較し全体的に高い数字であった。平均点以上×減少(平均)も同様に、受動的な対人行動①3.63,②3.75で、能動的な対人行動③3.69,④3.5,⑤3.69。キャリア展望に関する⑥3.63で、平均点以下×上昇(平均)よりやや高い数字ではあるが、平均点以上×上昇(平均)と比較するとやや低い結果であった。

3年間の活動について、自分なりに取り組む意味を理解して取り組む事ができましたか？(平均)では、平均点以下×上昇(平均)3.63%で、平均点以上×上昇(平均)の群が4.27%と最も高く、平均点以上×減少(平均)の群が最も低い3.53%であった。

3年間の活動について、カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対して満足ができましたか？(平均)では、平均点以下×上昇(平均)3.54%、平均点以上×上昇(平均)の群が4.2%と最も高く、平均点以上×減少(平均)の群が最も低い3.54%であった。

自身の変化について、受動的な対人行動がやや高い傾向が見られ、平均点以上×上昇(平均)でも同じくやや高い傾向がみられた。平均点以下×減少(平均)比べると全体的にやや低い得点であったことから、上昇した群では受動的な対人行動が高まることが示唆された。

3年間の活動について、自分なりに取り組む意味を理解して取り組む事ができましたか？(平均)平均点以下×上昇(平均)3.63%で、平均点以上×上昇(平均)の群が4.27%と最も高く、3年間の活動について、カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対して満足ができましたか？(平均)では、平均点以下×上昇(平均)3.54%、平均点以上×上昇(平均)の群が4.2%と最も

高かったことから、自分なりに取り組む意味を理解して取り組むことは、特にもともと自己効力感が高い群では高い数値がみられ、自己効力感の上昇と関係することが考えられる。

カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対しての満足については、次の自由記述の分析ともあわせて確認したことで、「まだやれることがあったかもしれない」という気持ちだが、元々自己効力感が低く上昇した生徒の中で多くみられたことがわかった。

自由記述については、遂行行動の達成(達成経験)、言語的説得(社会的説得)、代理的经验、情動的喚起(生理的喚起)に基づいてキーワードを確認し、記述内容により重複もあるが、分類を行った。以下は、具体的な代表記述である。

なお、誤字も含めて、あえて原文のまま記載する。

・遂行行動の達成(達成経験)

(達成感,できた,など)

忙しかったけど最後まで取り組めたから

発表することで、発信力、創造力を身につけることができたから。

フィールドワークと掛け算プロジェクトで、目標を明確にし、それに向けて突き進むことができたから

結構積極的に取り組むことはできたけど、中途半端な部分で終わってしまったものが、ひとつあるから

今まで経験のない活動をすることができたのでとても満足している。

自分なりに理解をして満足できる活動をできたから

発表の準備を計画的にする力がついたから

自分が出来ることはしたつもりではいるが、満足まではいってない。何かもっと頑張れたところ、チャンスがあったからだと思う。

他の人と比べて完璧には動けなかったけど自分的にはしっかり動くことが出来た成長できたから

出来たから

聞けて書いて発表ができたから

自分のやりたいことをしっかりできたから

積極的に取り組めたかと言われたらそうではないかもしれないけど、自分ができる範囲で頑張れたから

苦手だった発表を7分以上分かりやすく発表することが出来たから。

飯南地域のことについては気になったことを調べて、理解出来た。好きなことに関して調べられるときはとことん一から調べる事ができた

自分なりに精一杯できたから

色々な授業で地域の方と喋ることができたので、自身がついたからです。

そこそこできた

・言語的説得(社会的説得)

(励まし,アドバイス、など)

先生や、周りの人がいて分からないことを素直に相談できることがあったので自分も課題に対して取り組もうと意識が出たからです

先生にゼミの事のアドバイスをもらったから

・代理的経験

(憧れ,参考,など)

自分が出来ることはしたつもりではいるが、満足まではいってない。何かもっと頑張れたところ、チャンスがあったからだと思う。

自主的に活動はしていたつもりだけど、もっと他にもできることがあったと思うから

他の人と比べて完璧には動けなかったけど自分的にはしっかり動くことが出来た

積極的に取り組めたかと言われたらそうではないかもしれないけど、自分ができる範囲で頑張れたからもっとしっかりと取り組めたと思うから

・情動的喚起(生理的喚起)

(楽しい,面白い,など)

自分は発表することは好きなので、良かったです。自分の中での疑問やモヤモヤに答えが出たりするとスッキリするので、とてもいいです。

たのしかった

1年間かけてまとめることがオモシロイと思った

・ネガティブ

なんとなくでやっていけた。

あまり取り組めなかったから

調べ物が多く自分で活動する機会が少なかったから

わからない

あんまりできなかった

わからない

主体的に取り組めたか怪しかったから全部を普通にこなしたからまだ1年次で経験が少ないから

質問の意味(カリキュラムについて)があまり分からない

遂行行動の達成(達成経験)にあたる記述では、自分なりに理解をして満足できる活動をできたから、出来たから、自分のやりたいことをしっかりできたから、自分なりに精一杯できたから、といった記述の他、色々な授業で地域の方と喋ることができたので、自身がついたからです、その他、少しだけですが、自分から前へいっているような感じがしたから、成長できたから、という自身の成長を実感している回答があった。

また、結構積極的に取り組むことはできたけど、中途半端な部分で終わってしまったものが、ひとつあるから。自分が出来ることはしたつもりではいるが、満足まではいってない。何かもっと頑張れたところ、チャンスがあったからだと思う。他の人と比べて完璧には動けなかったけど自分的に

はしっかり動くことが出来た.という, 遂行行動の達成(達成経験)は感じているが, 更なる向上心が見られる記述もあった.

代理的经验にあたる記述として, 地域の社会人に対する憧れに該当する記述は見当たらなかったが, 自分が出来ることはしたつもりではいるが, 満足まではいってない. 何かもっと頑張れたところ, チャンスがあったからだと思う. 自主的に活動はしていたつもりだけど, もっと他にもできることがあったと思うから. 他の人と比べて完璧には動けなかったけど自分的にはしっかり動くことが出来た. 積極的に取り組めたかと言われたらそうではないかもしれないけど, 自分ができる範囲で頑張れたからもっとしっかりと取り組めたと思うから. など, クラスメイトなど他者を参考とした回答が見られた.

情動的喚起(生理的喚起)にあたる記述では, 楽しい, 面白いといったポジティブなもの以外にも, 自分のやりたいことがないのでテーマを決めることが苦痛だった. という声もあった.

表 3 0 : 効力感得点と生徒の学習目的に対する意識と満足度 (第二回目調査)

	入学 時の 効力 感得 点	現在 の効 力感 得点	差	3 年間の活動に ついて、自分 なりに取り組む 意味を理解して 取り組む事がで きましたか？ (平均)	3 年間の活動につ いて、カリキュラ ムの内容や自身の 取り組み方に対し て満足ができた か？ (平均)	自由記述への記述
平均 点 以 下	2. 75	5. 42	2. 67	3. 63	3. 54	<p>【1 年】</p> <p>なんとなくでやっていった。 忙しかったけど最後まで取り組めたから 発表することで、発信力、創造力を身につけることができたから。 フィールドワークと掛け算プロジェクトで、目標を明確にし、それに向けて突き進むことができたから 結構積極的に取り組むことはできたけど、中途半端な部分で終わってしまったものが、ひとつあるから しっかり頑張れたから。 そもそも3年もたっていないが、現時点では特に不満もなくいつているので、満足になっていると思う。 色々なこと学べたし、地域の人と関わり、地域の良さを知ったから 今まで経験のない活動をすることができたのでとても満足している。</p> <p>【2 年】</p> <p>自分のやりたいことがないのでテーマを決めることが苦痛だった 少しだけですが、自分から前へいつているような感じがしたから。 あまり取り組めなかったから 調べ物が多く自分で活動する機会が少なかったから フィールドワークなどで人との関わり方がわかったから ちゃんと授業に出席し、テストでの点数は平均点以上とっているから 自分は発表することは好きなので、良かったです。自分の中での疑問やモヤモヤに答えが出たりするとスッキリするの で、とてもいいです。</p> <p>【3 年】</p> <p>自分なりにカリキュラムを理解し自分なりにしっかりと取り組むことが出来たと思ったから 自分なりに理解をして満足できる活動をできたから 発表の準備を計画的にする力がついたから 他の高校では体験できないような斬新な学習スタイルであり、なおかつしっかりと大切なことが学べてよかったから。 わからない あんまりできなかった 積極的にいった 自分が出ることはしたつもりではいるが、満足まではいつてない。何かもっと頑張れたところ、チャンスがあったから だと思う。 自主的に活動はしていたつもりだけど、もっと他にもできることがあったと思うから 他の人と比べて完璧には動けなかったけど自分的にはしっかりと動くことが出来た</p>

減少	3.22	1.83	-1.39	3.67	3.83	<p>【1年】 わからない 主体的に取り組めたか怪しかったから ある程度授業を聞いていたらテストで点数を取れたから</p> <p>【2年】 成長できたから しっかり取り組めても理解が追いつかなかったりしていたので4でちゃんと取り組み方はしっかりしていたと思うので5にしました 発表に体制が付いた</p> <p>【3年】 出来たから 開けて書いて発表ができたから たのしかった 自分のやりたいことをしっかりできたから 積極的に取り組めたかと言われたらそうではないかもしれないけど、自分ができる範囲で頑張れたから 苦手だった発表を7分以上分かりやすく発表することが出来たから。</p>
平均点以上	9.07	10.67	1.6	4.27	4.2	<p>【1年】 もっとしっかりと取り組めたと思うから 時間がわかるようになった 全部を普通にこなしたから</p> <p>【2年】 先生や、周りの人がいて分からないことを素直に相談できることがあったので自分も課題に対して取り組もうと意識が出たからです 飯南地域のことについては気になったことを調べて、理解出来た。好きなことに関して調べられるときはとことん一から調べる事ができた 1年間かけてまとめることがオモシロイと思った 先生にゼミの事のアドバイスをもらったから 自分なりに精一杯できたから</p> <p>【3年】 ない</p>
減少	8.69	7.31	-1.38	3.53	3.67	<p>【1年】 そう思ったから まだ1年次で経験が少ないから 頑張れたから</p> <p>【2年】 色々な授業で地域の方と喋ることができたので、自身がついたからです。 質問の意味(カリキュラムについて)があまり分からない 内容がわかったから</p> <p>【3年】 そこそこできた</p>

第5章 考察と今後にむけた研究の課題

第1節 考察

本論文は、飯南高校の地域と連携した3年間のキャリア教育の取り組みと、地域の社会人の関わり方を自己効力感の情報源に整理し、高校生へのアンケート調査と学校へのインタビューから、第3章でも述べた以下の仮説を検証し、地域と連携したキャリア教育を通じての生徒の自己効力感向上に視点を置いた今後の地域の社会人の介入への考察を行うことを目的としている。仮説①地域と連携したキャリア教育を通して、高校生の自己効力感は向上させることができ、学年が上がるごとに情報源となる機会が蓄積することで上昇していく。

仮説②自己効力感の向上とともに、対人関係や将来展望への肯定的意識も向上する。

仮説③地域の社会人による、言語的説得(社会的説得)「遂行行動の達成(達成経験)、代理的経験、他者受容が生徒の自己効力感に影響する。

第4章では、仮説に対して以下の結果が確認することができた。

仮説①地域と連携したキャリア教育を通して、高校生の自己効力感は向上させることができ、学年が上がるごとに情報源となる機会が蓄積することで上昇していく。

学年ごとの上昇は確認できなかったが、入学時から現在までの自己効力感は全体的にどの学年でも上昇していたことから、飯南高校の地域と連携したキャリア教育を通して、高校生の自己効力感は向上させることができることが明らかとなった。

仮説②自己効力感の向上とともに、対人関係や将来展望への肯定的意識も向上する。

入学時の自己効力感得点が高く、現在の得点がさらに上昇した生徒は、そうでない生徒と比較して、対人関係や将来展望に関する項目の点数も高くなっていることが確認でき、生徒全体としても受動的な対人関係に関する意識が、特に高いことが確認できた。しかし、自己効力感と対人関係や将来展望の相関を確認するための調査項目や手法としては今回十分でなかったので、次回の課題としたい。

自己効力感が高いことは良いことであるが、下がることについては、自身の現在地を理解し、何らかの目標やもっとできるはずという認識をもっているとも考えられるため、具体的な記述内容を確認するなど注意して観察する必要がある。

仮説③地域の社会人による、言語的説得(社会的説得)、遂行行動の達成(達成経験)、代理的经验、他者受容が生徒の自己効力感に影響する。

生徒は、地域との関わりを実感しており、カリキュラムの中では特に遂行行動の達成と言語的説得(社会的説得)を意識していることが確認できた。

地域の社会人との関わり、働きかけとして生徒が認識をしているのは、言語的説得(社会的説得)、情動的喚起(生理的喚起)であり、情動的喚起(生理的)については、遂行行動の達成と言語的説得(社会的説得)のおかげで楽しかったということも文脈から考えられるのでやや含まれると考える。

また、生徒がお互いをモデルとし代理的经验として参考としている可能性も高い。

代理的经验に資する、憧れはやや少ないが、大事な要素とも考えられる。

上記を実現させたのは、プログラムの工夫による部分も大きいと考えられる。

3年間を通して、学びが継続していく仕組みと、毎学期にプレゼン機会が用意されていることや、インターンシップ・本気の大人講演会といった「自身のキャリアを考える機会」と地域での探究活動が並行して行われていたことが、生徒の基礎的・汎用的能力を育みながら、自身の将来について考え、様々な情報源を通じて、自己効力感を向上できるということが調査を通じて示唆された。

また、地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するために、高等学校が自治体・高等教育機関・産業界等との協働により構築されたコンソーシアムとしても、それを実現するために、生徒の成長を促す機会や人材発見についての相談と発掘を組織的に行っていたことは、第一章で述べた学校が抱える課題を解決するために有効なアプローチであったと評価でき、土方校長のインタビューにもあった「魂」を繋いでいくことに寄与していると考えられる。

そこには、育成すべき生徒の能力が明確に学内外に示されていたこと、高等学校・自治体・高等教育機関・産業界等との協働により構築されたコンソーシアムを通じて、信頼のおけるネットワークの中での人材選定といった要素が大きく、他の学校での展開時にも参考にできると考える。

今後の、地域の社会人介入にむけた考察としては、今回の調査を通し以下のようなポイントを踏まえた介入が更に生徒の自己効力感向上を促すのではないかと期待できる。

- ・学校としての期待や生徒につけさせたい力やつくりたい機会を明確にし、内部外部と共有すること。

- ・言語的説得(社会的説得)、情動的喚起(生理的喚起)となる外部人材の関わり、あわせて参考や憧れとなるような地域の社会人と出会う機会をつくること。

また、それにあたり学校としては、プログラムの中で以下のポイントへの留意が必要だと考える。

- ・関わってほしい人物を明確にし、組織的に共有すること。
- ・遂行行動の達成(達成経験)をうながす機会を設けること。
- ・将来について考える機会を設けること。

今回は、十分に上げられていないが、土方清裕校長へのインタビューでは多様な形での「コーディネーター」という存在の必要性が語られており、飯南高校では教員とコンソーシアムメンバー、時に地域の社会人がそういった役割を担っていた。

地域と高校生をつなぎ、それぞれの期待値や目的のコントロールや日程調整などを行うような役割を、現場の教員が担うこと。もしくは、そういった専門家が、教育現場に存在することが望ましい。

あわせて、教員の負担軽減や、教員のファシリテーター・コーディネーターとしての能力育成などの必要性も課題として考えられる。

本論文では単純化した項目と限られた範囲での調査となったが、本来は様々な役割や組織的な課題など複雑化した現状を考慮し、コーディネーター的役割について、地域の方や教員に対

しても調査を行うことなど調査範囲と調査項目について更に検討する必要があることを、言及しておきたい。

第2節 研究の課題

最後に本研究の課題と今後の展望を示す。

今回、地域と連携した3年間のキャリア教育で生徒の自己効力感が高まること、生徒の地域の社会人との関わりの中で特に「言語的説得(社会的説得)」、「情動的喚起(生理的喚起)」が確認されたことなど、今後の地域と連携したキャリア教育の構築に重要な見解が得られた。

しかしながら、研究手法をはじめとしていくつかの反省点があることは否めない。

第1に、今回得られた結果は、地方の公立高校1校のみから収集したデータによるものであったため、結果の解釈や一般化には十分な注意が必要である。

第2に、今回の調査対象とした生徒たちが卒業後どのような進路を選んだか、継続して自己効力感が高まっているのかといった、長期的観察ができていないこと。

第3に、今回はあくまでも生徒の主観による調査であったため、回答の精度については課題が残る。例えば、一回目調査と二回目調査で入学時の効力感得点が減少した理由については3学期の最終プレゼンテーションを終え、思うように取り組めなかったことや、理想に対して満足していく結果でなかったこと、進級や卒業を目前としたことで気分が沈んでいたことなどが考えられるが、十分に検討が行えなかった。

また、他の授業や行事・他者との関わり方など、その他変数の影響を排除することができなかった。今回得られた結果を参考とし、調査対象・調査方法・質問項目、それぞれの項目の相関関係性、因果関係などを更に精査して調査分析したい。

例えば、自己効力感が低くとも基礎的・汎用的能力のひとつであるキャリアプランニング力が高ければ、現在は将来についての模索時期であり、自分自身の現在値を確認し目標に向けて取り組んでいる最中であり、ポジティブなことだと評価できたかもしれない。

今後は、基礎的・汎用能力などの項目についても、丁寧に調査と分析を行い自己効力感との関係を確認することで、自己効力感の向上と減少について、さらにその背景や生徒の成長段階を確認できることを期待し、研究を続けていきたい。

注釈

[1]【普通科における将来の生き方や進路に関する体験活動の実施状況】

生徒が体験した将来の生き方や進路に関する活動を見ると「オープンキャンパス(64.9%)」が極端に高い割合となっており、次いで「職場の見学(25.9%)」「社会人の講話・講演(23.3%)」「卒業生の体験発表会(21.8%)」が20%台となっているがインターンシップ(16.1%)「インタビュー活動(10.4%)」は低い割合になっている。また、体験活動を全く経験していない生徒が12.1%いる。

【卒業生が在学中に実施して欲しかった体験活動】

卒業生が在学中に実施してほしかった体験活動を見ると「インターンシップ(44.3%)」「職場の見学(37.3%)」「卒業生の体験発表(32.1%)」「上級学校の体験入学(27.8%)」「社会人や職業人の講話・講演(24.1%)」「上級学校の見学や調査(19.2%)」「身近な産業や職業についての調査(17.2%)」「上級学校の先生の講話・講演(16.7%)」「高等学校の先生からの体験談(13.4%)」「その他(7.7%)」となっている。

[2]認定特定非営利活動法人カタリバ:認定特定非営利活動法人カタリバ PressRelease 2023年3月20日, (<https://www.katariba.or.jp/news/2023/03/20/40481/>),最終閲覧 2024.7.3)を参照

[3]文部科学省補助金受託時(2019年～)に校長として事業を推進。2018年4月～2022年3月。

[4]2022年1月5日メールでの質問票回答,同年1月29日メールでの質問票回答,同年2月17日質問票での回答を基に対面でのインタビューを実施。

[5]文部科学省補助金受託時,土方校長とともに外部人材の開拓と接続を積極的に担っていた。

[6] 本気の大人講演会は,2022 年度コロナの影響により一回のみ.インターンシップは,2022 年度コロナの影響により中止.代替案として,生徒がファシリテーターなど運営を全て行う発表会を実施した.その他,学校の実情に合わせ基本形を維持しながら実施時期や頻度など見直しを行っている.

[7] オンラインにて一時間程度のインタビューを実施. 対象は,2020 年卒の進学者(2022 年 10 月 26 日実施),2021 年卒の就職者(2022 年 10 月 31 日実施)の計二名.高校時代に印象的だった取り組み,出会った大人について,入学時との現在の意識や行動の変容,現在の活動等について聞き取りを行った.

[8]みんなの高校情報 2023 年度版: (<https://www.minkou.jp/hischool/exam/mie/deviation/>, 最終閲覧 2023.9.15)を参照

[9]三重県立飯南高等学校ホームページ:, (<https://www.mie-c.ed.jp/hiinan/>,最終閲覧 2022.10.26)を参照

参考文献

Betz, N. E., & Hackett, G.:The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men, *Journal of Counseling Psychology*,28,P.399-410,1981

Bandura, A:Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*,84,P.191-215,1977

Krumboltz, J. D.:A social learning theory of career decision making,G. In A. M. Mitchell, G. B.Jones, & J. D. Krumboltz (Eds.)*Social leaning and career decision making*. Cranston, RI: Carroll Press,P.19-49,1979

Richard,T.Lapan., Norman,C.Gysbers., Karen,D.Multon. and Gary,R.Pike:Deceloping Guidance Competency Self-Efficacy Scales for High School and Middle School Students,Measurement and Evaluation in Counseling and Development,No.30,P.4-16,1997

安達智子:進路選択に対する効力感と就業動機,職業未決定の関連について 女子短大生を対象とした検討,心理学研究/72 巻 1 号,P.10-18,2001

池辺さやか,三國牧子:自己効力感研究の現状と今後の可能性,九州産業大学国際文化学部紀要 第 57 号,P.159-174,2014

伊藤葉子:子どもとの相互関係における中・高校生の社会的自己効力感の発達,日本家政学会誌 54 巻 4 号,P.245-255,2003

浦上昌則:学生の進路選択に対する自己効力に関する研究,名古屋大学教育学部紀要 42 巻,P.115-126,1995

江本リナ:自己効力感の概念分析,日本看護科学会誌 20 巻 2 号,P.39-45,2000

奥山夢菜,小西凌:中学生の働くイメージに関する一考察学年差に着目して,ユマニテク教育研究所紀要第 3 号,P.62-72,2024

片岡亜紀子,石山恒貴:サードプレイス志向と地域自己効力感が地域コミットメントに与える影響:離職期間有無の差異を含めた検討,地域活性研究 9 巻,P.15-24,2018

木村 聡:ベネッセ教育総合研究所 小中学生の学びに関する調査報告書(2015) 研究レポート 5 自己効力感が高い小・中学生はどのような子どもかー子どもの特徴と保護者との関係に着目してー,2015

木村裕美,西尾美登里,久木原博子,古賀佳代子,井上ゆり子:地域で生活する虚弱高齢者の生きがい感の実態と影響する要因,健康支援 第 21 巻 1 号,P.39-44,2019

菰田孝行:第5章 体験Ⅰー中学生の職場体験学習が自己効力感に与える影響,労働政策研究報告書 No. 104 学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達ーキャリア教育との連携に向けて,P.93-109,2008

坂野雄二,東條光彦:一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み,行動療法研究 12 巻 1 号,P.73-82,1986

下村英雄:第6章 体験Ⅱー職場体験学習の効果の自由記述による検討,労働政策研究報告書 No. 104 学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達ーキャリア教育との連携に向けて,P.111-138,2008

辰巳哲子:キャリア教育を通じた生徒の成長—3年間の縦断調査による自己効力感の変化—, 研究紀要 Works Review/ 6巻6号,P.1-12,2011

中央教育審議会:初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申),1999

中央教育審議会:今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申),P.16,2011

中央教育審議会:今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申),P.25,2011

富永美佐子:高校生のための進路選択自己効力感尺度の作成—内容的妥当性・依存的妥当性の検討から—,東北大学大学院教育学研究科研究年報 54巻,P.355-376,2006

内閣府:我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度),2014

内閣府:子供・若者の意識に関する調査(令和元年度),2020

永作稔,新井邦二郎:高校生用進路決定自己効力感尺度の作成(2),筑波大学発達臨床心理学研究 14巻,P.9-84,2002

日本商工会議所:商工会議所キャリア教育活動白書 Vol.3～未来に向けたインターンシップの在り方について～,P.3-5,2016

藤井義久:児童の自己効力感を高める心理的支援の在り方に関する実証的研究:小学校生活不安尺度の開発を通して,岩手大学教育学部研究年報 第80巻,P.125-135,2021

溝上 慎一(編集),京都大学高等教育研究開発センター(編集),河合塾(編集):どんな高校生が大学、社会で成長するのか—「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ,学事出版,P.182-196,2015

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社:News release 高校と地域の協働が、生徒の資質能力の向上と人口減少の緩和に効果～地域社会と教育現場をつなぐ人材・体制と地域みらい留学がもつ可能性～2022年3月10日,2022

村上忠幸:知的パフォーマンスとしての探究学習,教育実践研究紀要 No12,P.69-78,2012

村山哲哉:小学校理科「問題解決」8つのステップ—これからの理科教育と授業論,東洋館出版社,2013

文部科学省:中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」＜抜粋

＞,https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm,
最終閲覧 2024.7.13)

文部科学省:平成 29・30・31 年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介 社会に開かれた教育課程, (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-

[ics/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-ics/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf),最終閲覧 2024.7.13)

文部科学省:高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書～普通科におけるキャリア教育の推進～,P.2-4,2006

文部科学省:高等学校キャリア教育の手引き 第 1 章第 1 節キャリア教育の必要性和意義(その 3),P.21-22,2011

文部科学省:【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 ,P.77-78,2018

文部科学省:【総則編】高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説,P.69,2018

文部科学省:地域との協働による高等学校教育改革推進事業,2019

文部科学省指定事業:令和元年度採択「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」(地域魅力化型)研究開発実施報告書 第 2 年次,

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873_00009.htm,最終閲覧 2024.7.13)2021

山田智之:職場体験による中学生の進路関連自己効力感の変容と影響要因(希望レベル・対人スキル)との関係,キャリアデザイン研究 4 巻,P.49-62,2008

吉田裕典:キャリア教育における職場体験の意義:正統的周辺参加の視点からの再検討,東京大学大学院教育学研究科紀要 49 巻,P.247-258,2009

リクルート進学総研:株式会社リクルート Press Release 2023 年 1 月 16 日,2022

付録

「学校・家庭外の地域の大人との関わりによる高校生の自己効力感変化について-飯南高校の事例効果測定-」調査用アンケート

「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）での活動についてを中心に、1年次（1年生は入学当初の自分）と比較しながら、考えすぎずにありのまま回答してください。

- 調査目的：飯南高校生の3年間の「地域と連携したキャリア教育」授業での外部人材との関係性、変化傾向を確認します。
- 社会貢献：結果を用いて今後の連携において地域の役割の考察やカリキュラムや高校生への支援の材料として貢献いたします。
- 使用用途：本アンケートは、研究の裏付けるための調査結果（数値資料）として使用します。目的外の利用はいたしません。

■情報の取り扱い：今回の回答は、パスワードがかかるPCに保存し、鍵がかかる保管場所にて適切なデータ管理の元、論文の審査完了後5年間保存いたします。

匿名性が保護されます。また、回答内容によって皆さんの成績などに対して不利益がこうむる事は一切ございません。

使用用途や情報取り扱いの配慮について同意のうえ、以下のアンケートへ回答をよろしくお願いいたします。

【問合せ先】

三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士前期課程 奥山 夢菜

621m0s1@m.mie-u.ac.jp

（指導教員：地域イノベーション学研究科 教授 青木雅生）

属性の確認

あてはまるものを選択してください

1. 学年

1つだけマークしてください。

- ☐ 1年
☐ 2年
☐ 3年

2. 性別

1つだけマークしてください。

- ☐ 男性
☐ 女性
☐ 無回答

3. 系列

1つだけマークしてください。

- ☐ 郷土・環境系列
☐ 介護福祉系列
☐ 総合進学系列
☐ コンピュータ系列
☐ 1年のため系列未登録

4. 現時点での進路希望

1つだけマークしてください。

- ☐ 就職
☐ 進学
☐ 未定
☐ その他 _____

5. 出身、もしくは居住地

1つだけマークしてください。

- ☐ 飯南、飯高エリア
☐ 飯南、飯高エリア以外の松阪市
☐ 松阪市以外

6. **入学前**に、学校授業外の活動（サークル、ボランティア活動、個人で参加するイベント等）で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験について

1つだけマークしてください。

- ☐ 参加したことがない
☐ おおよそ1~4回程度参加したことがある
☐ おおよそ4~9回程度参加したことがある
☐ おおよそ10回以上参加したことがある

「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）での活動を通じた人との関わりについて

7. 「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）の中で、特にどのような人と関わりを持ったか**3つまで**選択してください。

※1つでもOK

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 先生
☐ 友人
☐ 家族
☐ 地域の方
☐ 地域以外のサポートしてくれる人材
☐ どれにも当てはまる人がいない

8. 「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）の中で出会った地域の方（家族や先生、バイトやボランティア先以外の大人）の中で

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 憧れの人がいる
☐ なんでも相談できる人はいる
☐ 期待されていると感じる人がある
☐ 励ましてくれる人がある
☐ 自分の悩みや相談に対し、助けてくれる人がある
☐ 上記のような人は特にいなかった

9. 上記で印象に残っているエピソードがあれば教えてください

「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）での主体的な行動への変化場面

10. 3年間での活動について、自分が主体的に活動できるようになったきっかけとなる場面について**3つまで**選択してください。
※1つでもOK

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 地域でのフィールドワークの場面
☐ 先生に相談する場面
☐ まとめ作業の場面
☐ 地域の人に助言を受ける場面
☐ 発表の場面
☐ その他自分のテーマに関連した取組への参加
☐ 特になかった
☐ その他 _____

1年次（もしくは入学前）のあなたの意識について

1年次（もしくは入学前）を振り返り、その時の自分について答えてください。

以下の質問について、あてはまる場合「はい」を、あてはまらない場合は「いいえ」を選択してください。
どちらにも当てはまりにくい場合でも、より自分に近いと思われる方を必ず選択してください。
どちらが正しいという事はありませんので、あまり深く考えず、あなたのありのままの姿を答えてください。

11. ① 何か仕事をするときは自信をもってやるほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

12. ② 過去(今まで)にやってしまった失敗や、いやなこと(経験)を思い出して、暗い気持ちになることが、よくある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

13. ③ 友人よりも、すぐれた能力がある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

14. ④ 仕事を終えたあとで、成功したと感じることよりも失敗したと感じることのほうが多い

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

15. ⑤ 人と比べて、心配症(何かと心配してしまうような性格)である

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 16。 ⑥ 何かを決めるとき迷わずに決定するほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 17。 ⑦ 何かをするとき,うまくいかないのではないかと不安になることが多い

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 18。 ⑧ 内気で自己表現が控えめな方だと思う

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 19。 ⑨ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも積極的に取り組んでいくほうだと思う

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 20。 ⑩ どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 21。 ⑪ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野がある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 22。 ⑫ どんなことでも積極的にこなすほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 23。 ㊸ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 24。 ㊹ 世の中に役に立つことができそうな発想やできそうな目標が,できたと思う

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

現在のあなたの意識について

現在の自分について答えてください。

以下の質問について、あてはまる場合「はい」を、あてはまらない場合は「いいえ」を選択してください。

どちらにも当てはまりにくい場合でも、より自分に近いと思われる方を必ず選択してください。

どちらが正しいという事はありませんので、あまり深く考えず、あなたのありのままの姿を答えてください。

- 25。 ㊺ 何か仕事をするときは,自信をもってやるほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 26。 ㊻ 過去(今まで)にやってしまった失敗や,いやなこと(経験)を思い出して,暗い気持ちになることが,よくある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 27。 ㊼ 友人よりも,すぐれた能力がある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 28。 ㊽ 仕事を終えたあとで,成功したと感ずることよりも失敗したと感ずることのほうが多い

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 29。 ㊾ 人と比べて,心配症(何かと心配してしまうような性格)である

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 30。 ⑥ 何かを決めるとき迷わずに決定するほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 31。 ⑦ 何かをするとき,うまくいかないのではないかと不安になることが多い

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 32。 ⑧ 内気で自己表現が控えめな方だと思う

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 33。 ⑨ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも積極的に取り組んでいくほうだと思う

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 34。 ⑩ どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 35。 ⑪ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野がある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 36。 ⑫ どんなことでも積極的にこなすほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 37。 ㊸ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 38。 ㊹ 世の中に役に立つことができそうな発想やできそうな目標が,できたと思う

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

1年次（もしくは入学前）と比べたあなたの行動の変化について

1年次（もしくは入学前）のあなたと現在のあなたを比較して、答えてください。

- 39。 ㊺ ① 話しかけられても緊張せず自分の意見を話せるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 40。 ㊻ ② 大人の呼びかけに対して怖がらずに応答できるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 41。 ㊼ ③ 人前で自分の意見を話せるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 42。 ㊽ ④ 自分には見どころがあると感じ、怖がらずに地域や外部の大人がいるイベントへ参加できるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 43。 ㊾ ⑤ 自分が求めれば手を伸ばしてくれる人があると感じ、大人に相談出来るようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 44。 ⑥前向きに将来の事を考える事ができるようになり、将来の為に情報集や行動ができるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 45。 阪南高校在学中において、学校授業外の活動（サークル、ボランティア活動、個人で参加するイベント等）で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験について

1つだけマークしてください。

- ☐ 参加したことがない
☐ おおよそ1~4回程度参加したことがある
☐ おおよそ4~9回程度参加したことがある
☐ おおよそ10回以上参加したことがある

このコンテンツはGoogleが作成または承認したものではありません。

Google フォーム

令和6年「学校・家庭外の地域の大人との関わりによる高校生の自己効力感変化について-飯南高校の事例効果測定-」調査用アンケート

「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）での活動についてを中心に、1年次（1年生は入学当初の自分）と比較しながら、考えずすにありのまま回答してください。

★前回から記載が少し変わっている為、よく読んで回答をお願いします。

■調査目的：飯南高校生の3年間の「地域と連携したキャリア教育」授業での外部人材との関係性、変化傾向を確認します。

■社会貢献：結果を用いて今後の連携において地域の役割の考察やカリキュラムや高校生への支援の材料として貢献いたします。

■使用用途：本アンケートは、研究の裏付けるための調査結果（数値資料）として使用します。目的外の利用はいたしません。

■情報の取り扱い：今回の回答は、パスワードがかかるPCに保存し、鍵がかかる保管場所にて適切なデータ管理の元、論文の審査完了後5年間保存いたします。

匿名性が保証されます。また、回答内容によって皆さんの成績などに対して不利益がこうむる事は一切ございません。

使用用途や情報取り扱いの配慮について同意のうえ、以下のアンケートへ回答をよろしくお願いいたします。

【問合せ先】

三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士前期課程 奥山 夢菜

621m0s1@m.mie-u.ac.jp

（指導教員：地域イノベーション学研究科 教授 青木雅生）

1. 属性の確認

あてはまるものを選択してください

1. 学年

1つだけマークしてください。

☐ 1年

☐ 2年

☐ 3年

2. 性別

1つだけマークしてください。

☐ 男性

☐ 女性

☐ 無回答

3. 系列

1つだけマークしてください。

☐ 郷土・環境系列

☐ 介護福祉系列

☐ 総合進学系列

☐ コンピュータ系列

☐ 1年のため系列未登録（※1年のみ選択可）

4. 現時点での進路希望

1つだけマークしてください。

- ☐ 就職
- ☐ 進学
- ☐ 未定
- ☐ その他: _____

5. 出身、もしくは居住地

1つだけマークしてください。

- ☐ 飯南、飯高エリア
- ☐ 飯南、飯高エリア以外の松阪市
- ☐ 松阪市以外

6. 入学前に、学校授業外の活動（サークル、ボランティア活動、個人で参加するイベント等）で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験について

1つだけマークしてください。

- ☐ 参加したことがない
- ☐ おおよそ1~4回程度参加したことがある
- ☐ おおよそ4~9回程度参加したことがある
- ☐ おおよそ10回以上参加したことがある

2. 「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）での活動を通した人との関わりについて

7. 「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）の中で、どのような人と関わりが特に印象に残っているですか？3つまで選択してください。

※1つでもOK

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 飯南高校の同級生(クラスメイトや友人)
- ☐ 飯南高校の先輩、後輩（OB、OGを含む）
- ☐ 飯南高校の先生
- ☐ 大学や専門学校の教員
- ☐ 地域の社会人（経営者を含む個人事業主・企業・団体の方）
- ☐ 上記以外の地域住民の方
- ☐ 行政の方
- ☐ その他のサポートしてくれる人材
- ☐ どれにも当てはまる人がいない

8. 「産業社会と人間」（1年次）、「キャリアデザイン」（2年次）、「いいなんゼミ」（3年次）の中で出会った地域の社会人（松阪市内～飯南地域の経営者を含む個人事業主・企業・団体の方）で

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 困ったときには、助言や助けてくれる人がいる
- ☐ なんでも相談できる人がいる
- ☐ 期待されていると感じる人がいる
- ☐ 励ましてくれる人がいる
- ☐ 憧れの人がいる
- ☐ 楽しく話せる人がいる
- ☐ 上記のような人は特にいなかった

9. 上記で印象に残っているエピソードがあれば教えてください

3. 「産業社会と人間」(1年次)、「キャリアデザイン」(2年次)、「いいなんゼミ」(3年次)での主体的な行動への変化場面

10. 3年間での活動について、自分が主体的に活動できるようになった**きっかけ**となる場面について**3つまで**選択してください。
※1つでもOK

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 地域でのフィールドワークの場面
☐ 先生に相談、助言を受ける場面
☐ 地域の社会人に相談、助言を受ける場面
☐ まとめ作業の場面
☐ 発表の場面
☐ その他自分のテーマに関連した取組への参加
☐ 特になかった
☐ その他 _____

11. 3年間の活動について、自分なりに取り組む意味を理解して取り組む事ができましたか？

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

12. 3年間の活動について、カリキュラムの内容や自身の取り組み方に対して満足ができましたか？

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

13. 上記の回答理由をについて教えてください

4. 1年次(もしくは入学前)のあなたの意識について

1年次(もしくは入学前)を振り返り、その時の自分について答えてください。

以下の質問について、**あてはまる場合「はい」**を、**あてはまらない場合は「いいえ」**を選択してください。

どちらにも当てはまりにくい場合でも、より自分に近いと思われる方を必ず選択してください。

どちらが正しいという事はありませんので、あまり深く考えず、あなたのありのままの姿を答えてください。

14. ① 何か仕事をするときは自信をもってやるほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 15。 ② 過去(今まで)にやってしまった失敗や、いやなこと(経験)を思い出して、暗い気持ちになることが、よくある
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 16。 ③ 友人よりも、すぐれた能力がある
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 17。 ④ 仕事を終えたあとで、成功したと感じることよりも失敗したと感じることのほうが多い
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 18。 ⑤ 人と比べて、心配症(何かと心配してしまうような性格)である
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 19。 ⑥ 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 20。 ⑦ 何かをするとき、うまくいかないのではないかと不安になることが多い
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 21。 ⑧ 内気で自己表現が控えめな方だと思う
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 22。 ㉑ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも積極的に取り組んでいくほうだと思う

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 23。 ㉒ どうやったらよいのか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 24。 ㉓ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野がある

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 25。 ㉔ どんなことでも積極的にこなすほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 26。 ㉕ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 27。 ㉖ 世の中に役に立つことができそうな発想やできそうな目標が、できたと思う

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

5. 現在のあなたの意識について

現在の自分について答えてください。

以下の質問について、あてはまる場合「はい」を、あてはまらない場合は「いいえ」を選択してください。

どちらにも当てはまりにくい場合でも、より自分に近いと思われる方を必ず選択してください。

どちらが正しいという事はありませんので、あまり深く考えず、あなたのありのままの姿を答えてください。

- 28。 ㉗ 何か仕事をするときには自信をもってやるほうである

1 つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 29。 ② 過去(今まで)にやってしまった失敗や、いやなこと(経験)を思い出して、暗い気持ちになることが、よくある
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 30。 ③ 友人よりも、すぐれた能力がある
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 31。 ④ 仕事を終えたあとで、成功したと感じることよりも失敗したと感じることのほうが多い
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 32。 ⑤ 人と比べて、心配症(何かと心配してしまうような性格)である
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 33。 ⑥ 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 34。 ⑦ 何かをするとき、うまくいかないのではないかと不安になることが多い
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 35。 ⑧ 内気で自己表現が控えめな方だと思う
1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 36。 ⑨ 結果がどうなるか予想がつかないような仕事でも積極的に取り組んでいくほうだと思う

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 37。 ⑩ どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 38。 ⑪ 友だちよりも特にすぐれた知識を持っている分野がある

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 39。 ⑫ どんなことでも積極的にこなすほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 40。 ⑬ 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

- 41。 ⑭ 世の中に役に立つことができそうな発想やできそうな目標が,できたと思う

1つだけマークしてください。

1 2
はい ☐ ☐ いいえ

6. 1年次（もしくは入学前）と比べたあなたの行動の変化について

1年次（もしくは入学前）のあなたと現在のあなたを比較して、答えてください。

- 42。 ① 話しかけられても緊張せず自分の意見を話せるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 43。 ②社会人など大人の呼びかけに対して怖がらずに応えられるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 44。 ③人前で自分の意見を話せるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 45。 ④自分には見どころがあると感じ積極的に行動できるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 46。 ⑤自分が相談すれば助けてくれる人がいると感じ、社会人など大人に相談出来るようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 47。 ⑥前向きに将来の事を考える事ができるようになり、将来の為に情報収集や行動ができるようになった

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
そう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもそう思う

- 48。 飯南高校在学中において、学校授業外の活動（サークル、ボランティア活動、個人で参加するイベント等）で、地域の大人と関わるイベントやプロジェクトへの参加経験について

1つだけマークしてください。

- ☐ 参加したことがない
☐ おおよそ1~4回程度参加したことがある
☐ おおよそ4~9回程度参加したことがある
☐ おおよそ10回以上参加したことがある

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

謝辞

本稿の執筆にあたり,指導教員である三重大学大学院地域イノベーション学研究科青木雅生教授,PM 教員である三重大学大学院地域イノベーション学研究科西村訓弘教授には論文執筆にあたっての視座や分析の観点など,クリティカルなご指導をいただきました.深く感謝申し上げます.

また,三重大学大学院地域イノベーション学研究科八神寿徳准教授,三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士後期課程小西凌氏には,論文執筆の基礎や助言を頂戴し,より論文を発展させることができました.感謝いたします.

本稿で用いたアンケートデータは,三重県立飯南高等学校 土方清裕前校長,多賀秀徳先生,杉野直樹先生をはじめ先生方,生徒の皆様のご協力があり得ることができました.厚くお礼を申し上げます.